

「日本の男らしさ」に関する十三のエッセイ風諸論

― 三島由紀夫生誕百年に寄せて 三島の超克と藤原定家への道 ―

岩崎純一（岩崎純一学術研究所 所長、日本大学芸術学部 非常勤講師）

## 序 西国、中世文学、藤原定家、三島由紀夫

二〇二五年（令和七年）はちょうど昭和百年、そして三島由紀夫生誕百年にあたり、三島に関する様々な特集が生まれ、写真展が開催されている。そこで私に対しても、ドストエフスキー文学を中心とする文芸評論家であり日本大学芸術学部（以下、日藝）元教授・図書館長であった清水正氏（私が同学部で受け持っている「文芸批評論」の授業の前任者でもあった）より、「三島（清水氏の三島論を含む）」について何か執筆を」という有難いご依頼である。

書くことは多々あるものの、何分多忙中である。清水氏は、三島と共通点のある山川方夫について書くとのことだが、この作家については自決でなく交通事故で亡くなったことくらいしか知らない。しかも、「日本の男」としての私の関心の対象が三島由紀夫よりも森田必勝、いや、彼らよりも万場世志治や須原一秀の方に移って久しい。かの西部邁の自死への関心についても、関心度としては三島に対するのと同じくらいやや薄い方になる。しかし、三島の自決した年齢が四十五歳、今の私が四十二歳で、三島が自分以外は皆二十歳〜二十五歳という若者ばかりを集め、二十五歳の若い森田を（森田の強い意志とはいえ）道連れにしたというのは、私がちょうど今教えている世代の学生たちと民兵組織を作って自死するのと大体同じ関係性、年齢差だという計算になる。ここで単に何か書いただけでも、同じ男として、三島と自分との比較、および三島事件当時の学生や楯の会メンバーと今の学生との比較にもなるし、自然と三島への追悼にもなるだろう。

平岡公威（ひらおか きみたけ）に「三島由紀夫」というペンネームを提案したのは清水文雄とされており、広島大学や比治山女子大学（現・比治山大学）に赴任したことから、「三島由紀夫文庫」が今も比治山大学にある。

私は、和歌、とりわけ『千載和歌集』・『新古今和歌集』・『新勅撰和歌集』を初めとする後鳥羽院・御子左（みこひだり）歌壇（藤原俊成・定家父子などが活躍）のマニアであり、清水文雄や新古今風歌人・新古今論者の塚本邦雄の中世文学観には首肯するものである。ところが、清水文雄が中世国語文法を教え込み、才能を見出し、ペンネームまで考えてあげたはずの三島のほうは、『師・清水文雄への手紙』に書かれた師への並々ならぬ感謝の心は良いとして、本当に王朝文学や新古今集の美意識を師が教えた通りに理解したかは怪しいと考えるのである。三島は、学習院中等科時代の師の薫陶を思い出したのか、急速に藤原定家と自らを重ねるようになったらしく、『豊饒の海』の次に新古今集、とりわけ定家について書きたいと言いつつ残したもの、結局は自決のほうを選んだことが知られる。しかし、三島愛読

者・三島フアンのはほとんどはそのことに触れたがらない現実もある。

私が吉備（岡山）出身だから一層注目してしまうのかもしれないが、広島大・比治山大や清水文雄に限らず、私が愛してやまない国文学、とりわけ中世歌壇・中世文学の第一級史料・蔵書は、ノートルダム清心女子大学（岡山）、就実女子大学（岡山。現共学）など、昔から新旧の岡山県・広島県の女子大に集中して移管されている上、女子学生における中世国文の卒論・研究率もかなり高く保たれている。これは単に、中世文学における女流文学（女性）の優れた立ち位置のイメージや、これらの女子大にほとんど必置されている家政学・日本文化系学科の学びの延長で、起きている現象かもしれないが、それにしても、私にとっては吉備から広島にかけての地は今でも豊かで穏やかな万葉・中古・中世和歌研究の地なのである。

三島が晩年に広島（海上自衛隊学校）や熊本（憧れの神風連の乱の地）を訪れた際、師・清水文雄が三島に語ったという王朝文学の醍醐味にもっと優先的に耳を傾け、日本の京都から山陽に至る西国の和歌文化を浴びて東京に戻っていたなら、自決で死ぬよりも新古今集に生きる方を選んだ可能性は、どこまでも残されていたと思うのである。

三島事件（三島の死）が文学（三島作品）と関係するの否かについては、多様な議論がある。三島事件からオウム真理教を論じた飯島洋一は、

三島の死は、文学にも、ましてや政治にも関係のない死である。それはいうなれば、自らの思想のための死であろう。<sup>1</sup>

として、政治や文学との関係が未だ解き明かされていないとする観点自体を批判する。従って、三島は自らのナルシズムや自決のナンセンス、空虚さを分かっている、アイロニカルに、トートロジー（同語反復）的にやって見せただけなのだとする立場をとる浅田彰や柄谷行人のような論者を真っ向から批判する。

当の清水正氏は、長らくあちこちで『小説三島由紀夫事件』そしてインターネット上を含め）三島事件そのものへの感動を盛んに口にしてきた山崎行太郎氏の態度に疑問を呈している。三島事件は三島文学の一ページではなく三島文学からは生まれえないとする山崎の態度を、『三島由紀夫・文学と事件』で痛烈に批判する。

わたしは山崎の言う〈三島由紀夫事件〉に衝撃は受けたが、感動はしなかった。三島の行動に共感しないし、割腹と森田必勝の介錯による自殺に厳粛な気持ちになることもない。（中略）

わたしは『仮面の告白』の中に〈三島事件〉は含まれていると思う。山崎は「三島事件を三島の文学作品（小説）から解釈したり、分析することに反対である」と書いているが、わたしから言わせると今まで三島事件を三島文学からきちんと解釈したり分析したりした研究者や批評家がいなかったのはなしである。わたしは今回、『仮面の告白』論を書きおえて、さていよいよ他の人の『仮面の告白』論を検証しようとして驚い

た。『仮面の告白』は未だきちんと批評されてはいなかったのだ。<sup>11</sup>

小林秀雄、江藤淳、柄谷行人の系譜を引くと自負し、三島文学の本質が三島事件にあると考える山崎と、三島事件の端緒が三島文学、とりわけ『仮面の告白』にあると考える清水、ここまで綺麗な対比も面白いものだが、山崎が完全に作家・三島を無視して三島事件に感動し共感しているのに対し、飯島は「生け贄」の儀式による古代復興論を展開することになるので、山崎の無邪気すぎる三島の孤独への感動とは全く違う。一方で、三島事件が三島文学から出ていることを知るには『仮面の告白』を読むだけでも足りるとさえ見る清水氏の論を組み合わせれば、要するに三島は、『仮面の告白』を書いただけでも既に自決する要素を抱えてその後生きていたとも言えるのだろう。

私自身は、後述の古代史や神道霊学の観点などから、表向きは飯島にはかなり近そうだが言え、そうなると次に山崎に近く、直接の師・清水氏からは意外に遠いことになるのかもしれないが、かと言って浅田彰や柄谷行人からは全然遠くにいる。

私は、極めて結果・実状・実態重視のいわば科学的結論として、「芸術家には自殺願望じみたタイプの人間が多い」というよりは、「芸術家が行動（自殺）するとき、芸術の中で行動しきれておらず、その芸術作品に不備・不足・不十分がある場合である」と考える。つまり三島で言えば、「優れた美文であるはずの三島文学そのものに、三島事件を止められなかった瑕疵がある」、「実は三島は、『豊饒の海』創作ノートに、自決の準備計画よりも本気で取り組んでいなかった」、「三島は、自衛隊駐屯地のバルコニーで檄を飛ばし自決する男を日本語で文学の主人公に書けず、ペンの力、筆力、日本語の力、自分が自分を信頼できるだけの文体創出の力学、文学への信頼性が、割腹時に剣に入れた力よりも生涯弱かった」と考える。これが、事の顛末から見た最も冷徹な見方だと私自身は考えているが、結局、正解は三島本人に訊くしかない。

ついつい序文からうっかり本題に入りかけたが、ともかく、あまりの多忙の中でもこのように文章を書く頭になる時間を作らねばならない。以下、何とか捻出したその時間に書くものである。ひとまず、『愛の渇き』や『女神』や『美德のよるめき』や『音楽』、それから『行動学入門』を読んだか読んでいないか分からないスピードで読んだところであるが、更に中途半端に『禁色』を読んだところで（時間的というより心理的に）「もういいだろう」と独断し、これを書くのである。狙いは、三島由紀夫を語りつつ、三島が次は小説に書くとして自分で宣言しながら最後には自決という形でかなぐり捨てた男たち、そして私にとっては生涯捨てられない、私の父と私自身にも重ねて愛読している男たちである藤原俊成・定家父子の日本美（幽玄・有心の美）を、三島に代わって語ることである。

## 「第二の性」としての男

三島由紀夫は、一般女性向けエッセイとして『第一の性』を発表し、男とはいかなる生き

物であるかについて、「男性研究講座」として十三の特徴を語っているが、女性から見た理想の男性像に迎合して書いたのではなく、「男はこういう生き物であるから、許容して欲しい」思いを込めて書かれている。但し、筆致はやはり（ふざけてはいないが）一般の若い女性に対して諧謔、笑いを敢えて誘ったところがあり、三島の本心通りに書かれたものであるかはかなり怪しい。

尤も、『第一の性』とは、ボーヴォワールが女性を『第二の性』とし、「人は女に生まれないう、女になるのだ」と述べたことを利用したものである。ところが、今やボーヴォワールや三島の時代から随分とサイエンスは発展し、遺伝学的には男こそ「第二の性」であることが判明してしまった。

どういうことかと言えば、男の性染色体はXY（ヘテロ）、女の性染色体はXX（ホモ）、もうこの時点で、男とは「完全に対称な第一の性（シンメトリ）」としての女が（または世界と女を創り出し眺める神が）、生物学的・遺伝的多様性を生み出すために、性染色体の一部をねじ曲げて（捻り潰して）生み出した別の性」であることが示唆されるのである。

だが更に、ヒトその他の霊長類や哺乳類のオスを決めるのはY染色体でなく、そこに組み込まれたSRY遺伝子だと分かってきた。ところが更に、Y遺伝子やSRY遺伝子の有無に拘らずオスが生まれることがあって、性染色体がXYであってもSRY遺伝子が存在していてもメスになることがあることも判明している。<sup>三島 41</sup>

オス（男）を規定するものはY染色体でもSRY遺伝子でもなければ、それらの内外に存在している何かの遺伝子でも物質でもなく、我々が「男」だと思って「男」だと言っているに過ぎないもの、サイエンスが「男」なる遺伝的存在者を断定的に解き明かしてくれるだろうと我々が妄想しているその何かに過ぎないことが分かってきたのである。

そもそも、人間の女において性染色体がホモであるということは、人間の女においては「常染色体」と「性染色体」を分けず、全てが「常染色体」または「性染色体」としてもよいわけである。これは「女こそ第一の性である」とする私の持論でもあるが、驚くべきことに、最近北海道大学の研究チームによって、XXから精巢分化を引き起こす遺伝子発現が確認され、常染色体が性染色体に分化することも確認された。<sup>4</sup>

このような具合に、染色体やDNAに「男」や「女」を決定する何らかのスイッチや情報が準備されていると考える発想が人間側の空想、机上の空論であることを、科学自身が自分の首を絞める形で暴露し始めている時代なのである。

哲学・文学人間の空想の方が科学者の理知に先行して科学的に正しいことはよくあることだから、何も私が予言者であるわけではない。最新の研究に照らせば、Y染色体の中のSRY遺伝子の中の○○物質の中の○○分子の中の・・・と入れ子状に「男」を探し求めても、どこにも「男」はいないのではないかという私の直観が最先端のサイエンスだったのではないかという気がするのである。

この点、ボーヴォワールや三島と、私の「男女の序列観」は全くの逆である。ボーヴォワールや三島は、良くも悪くも男が神やら仏やらが創成または達観した「第一の性」で、女は

後発的に創られたものだと前提している。決して女が差別されてよいという意味では前提していないが、ともかく、我々人間に認知された「性」の順序として、女を二番手の性別であると推認している。

但し、この傾向は今も根本的には継続していて、フェミニズムにおいても、天皇の男系男子継承論においても、男を「第一の性」、ともかくにも女よりも優越・優遇・優先している(歴史上、過剰にそうしすぎていた)性と見る点で、少なくとも私には同じ思想に見える。或いは、現代を見なくとも、単に「家の中」や「家の奥にいる人間」を指す「家内」や「奥様」が「妻」に当てられた経緯からして、まずほとんどの文明人の自己または他己に最初に認識される、人間世界の主たる性は、確かに男なのであった。

しかし、ボーヴォワールや三島の言う「男女の序列」を反転させて、谷崎潤一郎のように男は自分の眼を潰してでも女性の官能に触覚的に服従すべきだと、私はここで言いたいわけでもない。そうではなくて、女において全ての染色体がシンメトリーであって、常染色体からも性染色体からも我々が「男」と呼ぶ性が派生的に生まれる事実がかえってサイエンスから分かり始めたということは、「常」とか「性」とかいう分類が一種の共同幻想であって、「常なる性」、「性なる性」、つまり「人間の性」とはそもそも「女」のことであり、「男は女の変形」であることの甘受の態度が最上最高の「男らしさ」であり、その態度を持つ人間個体を「男」というのではないかとする考え方を、私の持論としたいのである。ニーチェの言う「世界の心臓」や「世界唯一の根拠」、「始原の子宮」に遠く憧れつつ、かつ実母の子宮に敬服すること、これが先に言ってしまう、私の思う至高の「男らしさ」である。従って、多くの男は元来実母「お袋」の袋に戻りたい一心で生きることが許されると共に、虐待を受けて育った男子はコウノトリから生まれたと捉えても全く矛盾なく許されるのである。それは、その虐待した親の方が男と女を理解しておらず、サイエンスから見ても男と女ではないからである。

三島の男論がいかにか格好良くとも、それはいかなるサイエンスが発展した時代にも普遍的に当てはまるものでなければ、真の男論とは言えない。特に、三島が陶醉してやまないアマテラス、ニギハヤヒ、神武天皇以来の天皇史よりも短い時代にしか三島の男論が成立しなければ、三島の男論は忽ち虚構になる。自決したある男が「1+1=3」などと、ちよつと世間から外れた捻くれたことを格好良く言って、偶然に女性の黄色い声を浴びたとしても、次の時代の天才数学者が「1+1=2」を発見したら、社会と女性は自決した男の格好良さを忘れ、家計・食費・光熱費の勘定が正しくできそうな数学者の男を社会人の模範に、一家の主、選ぶのである。しかし、三島の男論がそうであっては勿体ないので、三島が男について一体何を言いたかったのか、勝手ながら推測しつつ、『第一の性』の十三条件をやや組み替えながらエッセイ風に「男らしさ」論を書くものである。

## 男とは(一) 男の英雄性について

このたびの米大統領選挙では、トランプ陣営はひたすらマチズモ（マッチョ主義、男性優位主義）を前面に出していた。共和党的価値観と屈強な白人男のイメージが結び付いたのがいつ頃からか定かでないが、トランプ政権ほど「共和党の男」強く正しい男」のイメージが出来上がった時代はなかっただろう。トランプ氏の暗殺に失敗した銃撃犯は、トランプからすれば弱い男であり、バイデン大統領ほか民主党・リベラル陣営とその支持者の男たちは女々しい男たちである。

この点からすれば、ロシア・プーチン大統領も相当なマチズモ崇拝者である。彼が、自分が手にしたいと欲する（実効支配の意味では既に手中に収めた）北方領土のある日本の柔道を嗜んでいたことは皮肉だ。しかし、ロシア人男性の平均身長から見てもかなり低身長である彼が、極寒の地で裸で肉体の鍛錬をしているところを映像に撮らせ、核兵器を含む暴力的な威嚇を展開しているのは、「真の男」白人の男」スラブ人男性」ロシア人男性」軍事的屈強さ」プーチン自身」最も神に近い男」という揺るぎない信仰から来る負の賜物であると見える。実際に、ウクライナ侵攻は「ロシア人を殺せというサタニズム（悪魔崇拜）」に対する聖戦」であると位置付けられており（プーチンの最側近の一人であるチェチェン共和国のカディロフ首長らもそう発言している）、ロシア正教会のキリル総主教もプーチンを「反キリスト者（ウクライナ、西側諸国）」に対する闘士」および「首席エクソシスト（悪魔祓いリーダー）」に任命している。<sup>14</sup>

どうやらトランプ大統領とプーチン大統領は似た男である。かの文豪ソルジェニーツインまでもが、汎スラブ主義・大ロシア主義に基づくマチズモの考え方を帯びてプーチン支持に回ってしまった。彼らがウクライナや西洋や日本に対して示す男の威嚇は、「ロシア人は酒に強い」だけでは済まないのである。圧倒的なマチズモをもってして相手の民族が手下に入り屈服しなければ気が収まらないという建て付けが、最初から出来上がっている男たちである。トランプ大統領は、ウクライナから手を引こうとしているので、一見戦争が面倒になったかと思いきや、米国が支援をやめると忽ち敗北するのがウクライナという弱小国家であるということをゼレンスキー大統領に言いたいだけであるようなので、結局は米軍の軍事を自らの男（陰茎）としての強さに使っているのである。このようなことでは、ソ連が意図的に引き起こしたウクライナの飢餓、ホロドモールと同じ構図なのである。

実はこのような「右寄りの男、保守の男」格好良い男、いい男、陰茎が凄い男（子孫繁栄に貢献できる男）」とする見方は、必ずしも男性から生じるとは限らない。むしろ女性の方が率先して生み出している気がする。従って私は、日本政府・保守系政党の男たちやトランプ大統領やプーチン大統領の母親および周辺の女性の性格を追ってみている。

事実、私が授業で取り上げた杉田水脈氏、はすみとしこ氏といった保守系女性政治家・作家は、保守系政党の男性を正義、リベラル男性を女々しい弱者としている上に、性被害に遭った女性そのものが世の中に存在していないとし、いたとしても性被害の主張はいわゆる「枕営業」の失敗の腹いせとさえ見なししている<sup>15</sup>。竹内久美子氏は、鞆丸が小さい男はリベラルになりやすく、リベラルの男は鞆丸が小さいと、双方向の因果関係を主張し

ている<sup>1)</sup>。彼女が産経新聞『正論』のメンバーだと聞いても驚かないだろう。今この私の文章を読んで、自分の性格の優しさが何となくリベラル政党への投票行動と繋がっている気がする男がいたら、それはこれらの保守系女性たちに気後れし力負けしているということであるかもしれない。

女性たちもこの状況である。女子学生にも、このような考えの学生がいる。左派・リベラルの男に生理的嫌悪感を抱き、とりわけいわ新撰組・山本太郎が嫌いだという男子学生と長時間話したことがあるが、立憲民主党支持の「リベラル彼氏」（革新派の恋人の意）のことが生理的に嫌で性交したくないという女子学生までいる。今自分の胸に手を当ててみれば、この「感受性」が分かる国民は意外に多いのではないかと想像する。

日本会議・神道政治連盟が集会・大会やウェブサイトで頻繁に用いる「男らしさ」なる言葉が、単に肉体がデカいか筋肉が多いとかいう程度のものと読んで全く差し支えない声明になっていることは何ら不思議ではない。杉田水脈氏や竹内久美子や日本会議の主張をじっくり分析し、いや、そのまま鵜呑みにすると、結局は左派・リベラル・革新系政党に票を入れる男の陰茎は弱く、LGBTなどの性的少数者（性的不能者）と共に日本列島から追放されなければならないことになるのだが、本当にそうなら、一大共産主義勢力を成したソ連・中国・北朝鮮の末裔であるプーチンや習近平や金正恩は性的かつ軍事的にひ弱で女々しい男だということにならないだろうか。

日本会議や神道政治連盟は、ひたすら神武天皇や日本武尊の武勇伝をマチズモと結びつけて、「日本の男が持つべきマツチョ性」を「保守政党に票を入れるという、日本の男が果たすべき義務」として説明しようとしているようだが、暴力革命に邁進した男たちはともかく、男の英雄性というだけなら、チェ・ゲバラのように一定以上の英雄・偉人として尊崇を受けた左派の男はいくらでもいるのである。自民・公明党に票を入れる男こそがカッコいいマツチョ男で、リベラル野党に票を入れるのが弱い腰抜けの男であるというイメージが、なぜ女性にも持たれるのであろうか。最も暴力的左翼であった連合赤軍や日本赤軍の思想的支柱・母なる存在が永田典子や重信房子といった女であったことを、政治家も社会もすっかり忘れたのである。フェミニズム論者の女性たちは、この世で最も優しい女性が左派女性であると思っているのかもしれないが、大いなる間違いであると私は考える。

そしてとどめに言うならば、トランプ・共和党政権がマツチョ主義であるのは明らかだが、原爆という究極のマツチョ兵器を日本に落としたのは民主党政権である。アメリカは国の成り立ちからして、マツチョである。

一方で、最近の十代・二十代の学生に「男らしさ」について尋ねてみると、まず最も多いのが「そのようなものが無い、或いはそういう「らしさ」の薄い社会を作っていくことが大切」、やや強い意見になると「その問いそのものが教育者に存在してはいけない」という回答であって、次に来るのが「人に優しい」、「高齢者に優しい」、「子供に優しい」といった意見である。しかし、男女問わず「人に優しい」ことが良いに決まっているので、これは全く「男らしさ」の回答になっていないわけで、つまりは「男らしさ」というものは今は存在し

ていないのである。存在しているとしても、例えば髭を生やすことよりも髭を清潔に剃ること、男子でも脱毛サロンに通う自由があること、爪を塗っていいこと、などが男の特徴として出てくるだけで、今の日本には、トランプ・プーチンのマチズモも存在していなければ、万葉時代の防人や戦国武将のような武勇伝の男も存在してはいないのである。この春から、海上保安大学の校歌の歌詞も、「海を護らむすらを（益荒男・丈夫）が」が「海を護らむ若人が」に変更される。

男が脱毛したり化粧をしたりすることは、現代の若者においてはほとんど国家の運営において問題視するようなこと、国難ではなくなっているのである。その一方で、先にも書いたように、陰茎が機能する左翼の男もいてはいけないし、陰茎が小さな保守男子がいてもいけないという保守派とフェミニズムの圧力がかかった社会なのである。ジェンダー問題が叫ばれる昨今にあつて、わざわざ日本の心、Japanese spirit を日本人が叫ぶのは日本人の仕事ではなくなっているらしく、むしろ国内外在住の外国人が日本文化を紹介するテレビ番組が増えている。

三島は、男は皆英雄であり、また英雄であるべきだと考えたが、ボディビルの実践など、あまりに筋肉美に偏った視覚的マチズモ（見た目のマツチョ主義）により、三島の言いたい「英雄」の意味は結局のところ、却つて霞がかかったように不明瞭である。不明瞭であるばかりか、あまりに筋肉美に拘るということは、遺伝的に高身長・高体重・高筋肉量である白人と黒人の男こそが男であつて、三島が本来徹底的に保守・守護したいはずの日本の男、そして天皇は、英雄的でない軟弱な男であることになるのである。

事実、三島の自宅や調度品の西洋趣味にもかなり表れているように、三島には、あわよくば昭和天皇を美輪明宏のような美声と肌を持つ日本人離れた中性欧風美男子に、もつと言えば白人、古代ギリシャ・ローマ人か、聖セバスチャンに差し替えるべきと考えていたふしがある。これは恐らく、三島が今生きていたとしても同じことで、上皇陛下および今上陛下に対しても同じ本心を抱いた可能性が極めて高い。

なぜ生まれつき筋肉の育ちにくい体に生まれ、或いは盲目で生まれた知性的な男にも英雄性はあり得るのかといったことが、三島には薄々は分かっていたつも、実のところ最後まで分からなかったか、認めようとしなかった。或いは、自分自身が主張している「英雄的な男」の身長と体格と陰茎を持つていない典型的な男が自分であるというコンプレックスから生涯逃れられなかった。いわば、三島は、西洋白人男性の黄色人種男性に対する優越性を、自ら認めた日本の男の一人となつてしまった。敢えて言うならば、日本の男は三島の「せい」で、白人の男を見かけただけで今後もつと劣等感を覚えて死ななければならなくなった。

この矛盾を解消するには、三島の最後の行動（剣）よりも三島文学（ペン）が圧倒的に英雄的であることを三島自身に告げるしかないのだが、当然それは叶わない上に、三島は聞き入れようともしないだろう。東大における三島と全共闘との論争<sup>22</sup>は、お互いの武の正当性を文（言葉）に置き換えて語り合つたものであるが、そこでさえ三島は、東大全共闘に対し、日本の男の足の短さを思い知れなどという、議論に全く無用な要素を打ち出して日本民族



の天皇の元での結束に利用しようとした。自分自身の言う英雄主義が、自分の紡ぎ出す純文学でなくマツチヨ主義の方にあると言いながら、マツチヨでない昭和天皇の元で全共闘と三島が折り合えるはずがないのであり、三島は相当自分の体に劣等感があつたと考えられる。

もし肉体美ないし身体能力が男の英雄性の代表格であるならば、それは最終的には陰茎主義に陥るのは目に見えている。三島の論法を繰り返すと、最後には男性中心の先進科学文明の記録を次々と叩き出す白人男性の陰茎と、生まれつきガタイの大きな黒人男性の陰茎が「英雄」であり、三島を含む黄色人種の陰茎はみすばらしく女々しいものであることに行き着く。

あまりにIQの高すぎる三島は、自分でこの矛盾に気付いていて、「女との性行為（または男色行為）の危機性と一回性」の主張によって挽回しようとした。つまり、女との性行為（または男色行為）とは、狩りに出る前の男、出陣前・特攻前夜の兵士、燃えさかる金閣を目前にした男が行うべきものであって、この哲学を有する最高峰の行動倫理に武士道を見ている。そもそも真の「童貞のおわり」とは、「男が動物の雄としていさぎよく、最も美しく生き、迅速に死ぬときにしかあらわれない。たとえば、特攻隊員が、出撃の前夜に、はじめて女を知ったとき」にしかあらわれないと見た<sup>xiiiio</sup>。

そこらの町角で、得意の鼻をうごめかして、童貞を失った話をしている若者は、生でも死でもないコンニャクにぶつかっただけのことであり、彼は一生そのコンニャク演技をくりかえすことでありましょう。<sup>xiii</sup>

三島の言いたいことは、世のほとんどの既婚者の男や異性と交際中の男はニセ性交者（万年童貞）であり、真の童貞の男は既に童貞のおわりを見ているという意味だろう。

三島は生前、天皇の扱いが政治天皇に留まるなら自分にとっては自民党も共産党も同じものだとかちこちで語っていたが、こう見てくると例えば、安倍晋三という男が真の男であるか、岸田文雄や石破茂といった男が真の男であるか、といった判定の結果は、いとも簡単に予想がつく。この点では、私は三島と意見が一致するかもしれない。

最近私は、長崎・島原の人々と交流している。三島は陽明学の観点から、大塩平八郎の乱や、神風連の乱に始まる土族反乱を偏愛したが、私は島原の乱を戦った百姓やキリシタンの男にも英雄性はあると思う今日この頃である。

## 男とは (二) 昭和の男らしさについて

三島の死後、一九八〇年後半になると、いわゆる「三高」が男らしさの象徴となる。バブル崩壊後には「3C」が流行した。これらはいずれも女性側が生み出した言葉であった。

三島が自決の地に、京都や高千穂や伊勢や皇居近くでなく、自衛隊市ヶ谷駐屯地を選択し、

決起できるはずのない自衛隊員を決起させられないまま、たった五人の男しか見ていないところで自決に至ったのは、私の中ではずっと、御所に向かって架空の高御座（たかみくら）を前に自決した万場世志治の自決の様式美と比べられるものである。自決に様式美などあるか否か分らないが、遺した和歌、遺書、自決の様式のいずれを取っても、三島の辞世の歌、『豊饒の海』の末尾、当日の檄文、介錯の際の首が切れないドタバタ劇の全てを上回る完成度を誇っているように見える。

語と語、文と文を緊密な関係性、硬度の高い緊張度で結びつけていく三島の文体からすれば、同じ自決でも、その辺りにいる凡人の男の自殺どころでない計画性をもって遂行するかに思えるのだが、用意した檄文が、それまでの三島の全ての作品を下回る出来に私には思えたものだし、遺詠の歌に関しては森田必勝の歌の方が、和歌マニアの私には圧倒的に感銘を得るものだった。

おまけに、『豊饒の海』は仏教の唯識論を主軸に据えたものであって、自決の直前に書いてもおかしくなさそうな神道関連（神風連の乱など）や藤原定家（和歌における幽玄美や枯淡美などの日本の美意識）を書こうとせず、しかも死ぬといっても龍樹の空論や般若心経の五蘊皆空でなく唯識論の途中やめのように末尾を切ったところで、死んだのである。

須原一秀でさえ、生前から哲学的プロジェクトとして自決を計画し、最後は神社という場所を選んだのである。三島は自ら憲法を問題にしていながら、自衛隊駐屯地で死ぬという様式は、普通の男が当時の大蔵省に突進して死ぬとか、警察署に乗り込んで死ぬ様式と何が違うのであろうか、どこに凡庸でない至上・至高性があるのだろうかと疑問に思ったものである。万場世志治や須原一秀のように、なるべく神々の吐息のかかった地に我が身を近づけるなり置くなりして死を遂げる方法を、三島は全く取らなかった。三島は政治天皇・人的天皇と文化天皇・神的天皇とを区別したが、せいぜい天皇を政治天皇に貶めた憲法を否定するにせよ、少なくとも日本国憲法第一章が特別に規定する天皇の神格のかかった神域（御所なり、神社なり）を選び、天皇価値を文化天皇・神的天皇として憲法から引っこ抜き助け出す意味を込めて自決してもおかしくなかったはずである。

三島のいう男の英雄性や男らしさの源泉が何であるかについて、実際に行われた自決パターンが前述のようなものであるから、極めて分かりにくいのである。単に華々しく散り、自決したことが広く喧伝され、金閣寺放火事件並みのアプレ・ゲール事件の「カッコイイ男バージョン」として捉えられ、多くの男女に「もうあの人の作品が読めないのは悲しい」、「三島がノーベル賞を受賞するところを見たかった」と泣かれればそれでよかったのかとさえ思われる、相当に雑な死に方である。

ところが、三島の思う「男らしさ」を規定しているところの「天皇」概念の源泉は、意外に古いのである。こればかりは、若い森田必勝も到達できなかった古代史観と思われる。

三島は、『古事記』の時点で、既に神的天皇と人的天皇の分離を見ている。この見方は、実は吉備（岡山）出身であり、吉備史を研究している中で、「スメロギ」や「スメラミコト」といったのちの天皇を意味する大和言葉が吉備で生まれたと確信するに至った私や吉備史

家の間では普通なのだが、三島は（ほぼ）単独で、『古事記』に書かれた天皇に日本が戻るべきなのではなく、『古事記』さえも天皇の神格と人格の離別を記録しているという気付きに至った。私は、この点は三島について最も高く評価している点である。つまり、景行天皇のように、人間天皇の元祖となったような天皇ではなく、その天皇に追いやられ、天皇になれなかった倭建命のような皇族男子らに、「天皇」を、「真の男」を、三島は見出すのである。

つまり、三島にとっては、突き詰めれば突き詰めるほど、『古事記』の時代にさえ、男が男を失った「近代」が既にあつたと見えるのであり、三島の言う「近代」ないし「昭和」の日本はそれだけ極めて浅はかなものに見えていたのである。三島の古代史観は、万場世志治や須原一秀に引けを取るものでは決してない。

恐ろしいと言うべきか、この三島の自決パターンは、理解の仕方によっては、石原慎太郎の政治家転向や、今でも時々話題に上る戸塚ヨットスクールの「男らしさ」観と手を結んだものに見えるのである。そもそも石原慎太郎は、戸塚ヨットスクールの思想の根っからの賛同者の一人だが、これは当然彼らには彼らなりの共通した「日本の男観」があるからである。戸塚宏氏も、仏教、儒教、神道、古代史ほかあらゆる哲学を渉猟した結果、あのような教育思想を持つに至っている。戸塚氏の古代宗教の勉強の仕方も相当なものだが、このスクールの場合、経営者側の教育手法が変わらない限りはマリンスポーツの訓練の最中にまた死者が出る可能性は残されている上に、逆に三島のように天皇賛美の自決者が出ても何ら不思議ではない。

明治初期においては、和歌・漢籍・英仏独語のいずれもできる最高の教養人たちが政府や文人を占めていたために、欧米列強による日本の植民地化を継続的にぎりぎりのところで避け続けることができた。ところが、戦後になると、日本国民に気付かれないようにGHQが天皇、日本文化、国民生活のいずれをもアメリカナイズすることに成功した。つまりは、日本人の前頭葉のアメリカ化が成功した。本来、特に男の脳辺縁系・脳幹が弱いことを弱い男と言うのであり、ヒト科の基層にある古い脳部位に西洋的知性が前頭葉として乗るべきであるのが日本の男の、いや男一般の脳と肉体であるのに、ほとんどの日本の男がその様子を捨てた。文明の恩恵に浸るばかりの男には、海の威光や山の威厳といった大自然が強制的に与えてくる恐怖というものが与えられることがない。その恐怖の植え付けを、ヨットというマリンスポーツにおいて「進歩を目的とした有形力の行使」である体罰として行っているというのが、戸塚ヨットスクールの主張である。これは言うまでもなく、三島と言わずとも、石原慎太郎の教育観に一致するものである。私もほとんどの部分に異論はない。マスメディアが戸塚氏の日本論を聞こうとせず、批判のみを行っている現状は言うまでもない。

確かに、妻と子供を残しながら九州防衛に出かけていく万葉時代以前の防人の強靱さ、朝鮮特需や高度成長期に浮かれているような男にはもう分からない戦中の特攻兵士の心、これらを、いかなる徴兵制も戦死も自決も無しに男に体で覚えさせようとしたならば、かつ強制的に戦闘地域や自然災害の被災地や原発の近くに男を送り込み住まわせる方法をとらないならば、必然的に戸塚ヨットスクールの思想になるのは目に見えている。男は人生で何回

か海に落ちなければならない。石原慎太郎も、戸塚宏に真の男を見たのである。

三島が生きていたら戸塚氏に男を見たかどうか正確には不明だが、ちょうどこれを書いている今、私の父からの情報で、「石原慎太郎に政界進出を決意させた三島からの書簡が新たに見つかった」とのことだ。既に出ていた『三島由紀夫 石原慎太郎 全対話』などには当然ない内容で、「卑怯者ばかりの文壇で、貴兄にだけは望みをかけてゐるのですから、どうか大切になさつて、十分の御静養を望みます」、「病気を一つの静観のチャンスとされ、世の有象無象のあわただしい動きをしばらく冷たく御覧になることを望みます」と薄々政治家転身を勧める内容となつていようだ<sup>xxix, xxx</sup>。この後、天皇観を巡つて三島と石原は意見を異にするようになり、自決後には石原は三島を「虚構の人」呼ばわりするようになり、戸塚宏に共鳴し、戸塚ヨットスクールを支援する会会長となるのである。従つて、石原慎太郎の中には、三島になくて戸塚にある「真の男の何か」があつたわけである。

三島のいう「天皇」とは、男が西洋的理知を学んだ後に前頭前野で考えて憲法第一章において発見するような代物でないことは確かである。それは男の脳幹や辺縁系、間脳で官能的にアプリアリに発見されているべき価値である。究極的には、三島の愛する「天皇」とは、「人神・神人」である古代の男を「天皇」なる政治ツールに仕立て上げた、ヤマト王権なる愚かな氏族集団よりも前の「男」ということになる。つまり、三島は（実行はともかく、概念的に）天皇殺しを画策した可能性さえある。

但し、世のほとんどの男にこれが分らないとき、最も手っ取り早いのは、男の中でもとりわけ陰茎の大きな個体が登場して威厳を示すことである。しかし、黄色人種にはそれはあり得ない。石原は陰茎で障子を破る小説『太陽の季節』を書いて、遂には政治家や都知事として、体罰肯定論のもとで教育を変えようとした。戸塚宏は、海に男子を突き落とすことで古代の防人、戦国武将、大和魂の男を急速度で養成しようとしたが、死者を出さずに成し遂げることは不可能であつた。三島は、自分の書いたどの純文学作品よりもあまりに完成度の低い檄文を掲げて自決した。しかし、自衛隊の防人化の理想は碎け散つた。三者三様、それぞれが自分を男らしいと考えている。そして、どの行動も、夢が現実にあまりに先行している。事実は小説より奇なりとはこういうことだろう。

### 男とは (三) 男の清潔さについて

三島作品には、私にとって読んでいて恥ずかしい作品とそうでない作品がある。筋金入りの三島ファンなら怒るだろうし、三島嫌いの人ならどれもが身勝手に自決した男の身勝手な小説と映るだろうが、少なくとも私の場合は、私が三島よりも詳しいと自負している神道史や古代史のイメージと三島が小説に投影しているそれが「ずれ」ている場合に、気持ち悪さや恥ずかしさが起きるようである。

『音楽』は、インセスト・タブーを侵犯する、つまりは、兄妹間の近親相姦によって許嫁や恋人を愛することができなくなった女を描いたものだが、例えば、ニーチェのいう「音楽」

が、ディオニュソスの神を奉じて発露する総合感覚的官能世界としての芸術全般を示すのに対し、三島は単に性的絶頂の意味に用いることに強いて努めている。おまけに、渋澤龍彦などは、「新宿あたりのゴーゴー喫茶に屯（たむろ）する若い女性のあいだに、「ゆうべ、あたし音楽を聞いたのよ……」などという流行語が生まれていたかもしれない、と私は空想する」<sup>xviii</sup>と評している。

女性の性的絶頂を音楽に喩えようが、演劇に喩えようが自由だが、この二人における女性の性的絶頂を一大流行イベントに祀り上げる吞気ぶりにはよほどのサディズムかマゾヒズムを有する男からしか出ない吞気ではなからうかと思え、『音楽』は私にとって、三島作品の中では『潮騒』以上に読んでいて恥ずかしい作品である。

事実、サド裁判つながりで仲のよかった二人であるが、三島のフロイト・ユング趣味やバタイユ趣味から来る精神分析小説は、日本古代史への直結性が非常に分かりにくい。或いは今もよく分からない。私の場合は、男は永遠に女の「音楽」を聴くことはできない、アマテラスや神功皇后や万葉女性や古代ギリシャ・ローマ女性の「音楽」をひたすら記紀や万葉歌やギリシャ・ローマ神話から想像するだけであるとして、何の不満もない諦念に生きるのだが、三島や渋澤龍彦は、精神分析の手法によって女性の「音楽」に手をかけすぎているらしいを感じていない。そこはやはり、私の趣味ではないのである。

とりわけ三島の描く「音楽」は、ウェスターマーク効果を無視した緊張した人工美から来る「音楽」である。従って、日本女性の「音楽」であるにもかかわらず、民謡の調子や雅楽の響きではなく、交響曲かピアノ協奏曲のように計算された西洋「音楽」である。到底、着物の奥にある「音楽」とは思われない。三島の自決直後から、いわゆるウーマン・リブ運動が勃発し、この一部の急進派が今のフェミニズムに発展するわけであるが、『音楽』は、インセスト・タブーの侵犯という倫理の不潔を描きながら、女性にも「音楽」が流行して欲しい、という願望を自分たちでは清潔であるかのように記述している点で、三島の思う男の清潔さに追いついていないという瑕疵があると思う。

古事記・日本書紀ほか、新撰姓氏録など、日本の神々と原始氏族・豪族の系図の分かる書物を見ると、（あくまでもヤマト王権以来の日本国中枢が正統だと主張する）日本の皇統は錯乱的な近親結婚の大劇場によって生じた王朝だということがよく分かる。天皇家や貴族については、一般の民と違い、血の純化によって隋・唐の中国皇帝に対する正当性の主張という事情もあるが、三島はアマテラスとスサノオの誓約（うけい）に代表される皇統の成り立ちに出会って以来、天皇制護持とインセスト・タブーへの自分なりの理解の挑戦と、天皇とインセスト・タブーへの憎悪・破壊願望とが混ざったらしい。つまり、皇室女性の「音楽」に他の家系の女の「音楽」が入らないことをもって、天皇の神格が純音楽によって保証されるものとしつつ、それを肯定する自我に苦しんでもいたようだ。私自身は、インセスト・タブーについては、三島とは異なる見解を取るものだが、三島の『音楽』には、つい最近まで近親結婚を繰り返してきた天皇とその皇統の男子を支える女たちが有すべき「音楽」を説諭した小説に読める。

先に述べた石原慎太郎の好色ぶり、複数の愛人と婚外子の存在については、既に知られることであるし、そもそも三島の時代には今のようには、セクハラ、パワハラ、モラハラなどという言葉も概念もなかった。あまり言いたくはないが、東南アジアの少女たちの身体は昭和日本男性の格好の慰安旅行先であった時代のことである。洪澤龍彦の呑気ぶりはむしろ普通のことであった。先の新発見の三島の書簡を巡って、石原の好色ぶりが改めて話題になっている。今私が書いたのは、三島本人というより、三島の一部の精神分析小説における不潔感と、三島の小説を利用して世の女における性的絶頂の流行を夢想する洪澤龍彦の不潔感に対する嫌悪感だが、男の思う男の清潔・不潔は、男と星の数だけあるのだろう。

三島の思う男の清潔・不潔は、むしろ同性愛に対する態度の方がはつきりしていて、性的少数者、特にゲイはどこまでもマイノリティであるべきで、マイノリティのゲイは清潔であり、広く社会的認知を得たときにはゲイの価値は凋落し不潔なものに終わると考えた。これについては私も同意するものである。マジョリティがマジョリティのまま安住する態度と、マイノリティがそのマイノリティぶり、被虐の歴史を世に過剰に知らせようとする態度とは、同じものである。憲法に同性愛者の結婚許可が記述された暁には、同性愛の価値は想像よりも遙かに早く凋落すると私も考えている。天皇と同様に、同性愛は憲法に書けない性質のものだからである。あくまでも天皇との男色行為と天皇殺しが両立する三島にとって、当たり前の考え方であった。女性同性愛に対する三島の態度表明は男性のそれに対するほど熱心でないが、評価は同じものであっただろう。

昨今、いわゆる一連のジャニーズ事件が問題になった。いわば、ジャニー喜多川なる男による壮大な同性愛の樂園建設事件である。世代の違いすぎる私には、例えば伊藤文學の『薔薇族』のような同性愛雑誌の大人気と、ジャニーズの大人気の違いはよく分らない。ジャニーズ事件後も、少年たちがかわいそうという意味でなく、私たちの愛する彼らが被害に遭っているはずがないという主張によって、ジャニーズ集団を愛し続ける女性も多く見かける。

男の清潔さは「いき」のことであると言い換えられると私の考えを言えば、あまりに簡単すぎるかもしれないが、九鬼周造の『「いき」の構造』は日本の男の一定以上の清潔な美を提唱できていると思う。これについては、後述するとしよう。

#### 男とは(四) 男の気遣いについて

三島は意外に、到底日本語でしか言い表せない日本の芸術・文化概念をわざわざイングリッシュやフレンチに言い換えることが頻繁にあった。その方がウィットに富んだジェントルマン、ユーモアのあるマッチョに思われると考えたのかは分らないが、例えば「デリカシー」(三島自身は「デリカシイ」と書いた)もその一つである。

既に九鬼周造が『「いき」の構造』の冒頭において、「いき」はいかなる欧米語の単語にも非該当の、我が国にしか存在しない美的態度であると喝破し終えているので、日本語の純文

学を愛する天皇崇拜者が「繊細さ、優美さ」や「気配り、心遣い」を「デリカシー」と言ったことにデリカシーがあるとは思えない。もつと言えば、類似概念を日欧双方の言葉に訳し合っただけで日本精神・東洋精神による西洋精神の超克が起きうるとは全く思えないが、ともかく三島は英語が得意なこともあって、かえって日本美を何でもかんでも最も近い表現の英語で言えた。但し、「デリカシー」と「エチケット」を混用したり、同じものと見たり、違ったものと見たり、一定しているわけではなく、要するに九鬼の言う「いき」な男と言えば、三島が言いたいことに一番近いわけである。三島の英語への言い換えによる「格好付け」には極めて回りくどい銜学を感じないではない。西洋かぶれのデリカシーのあるダンディな男といえ、白洲次郎の方がまだそうだという気がするのである。

男らしさを「益荒男（ますらお）ぶり」、女らしさを「手弱女（たおやめ）ぶり」とし、前者を万葉集、後者を古今和歌集の歌風とし、日本の美意識一般を語る風潮があるが、これらは江戸時代以降の国学の息のかかりすぎた古典論であり、私自身は大学の自分の授業でもほとんど採用していない。もしこの論が正しいとしても、西洋列強が正しい益荒男、日本列島全体が間違った手弱女ということになるのであり、日本の男は古代から間違った手弱女ぶりということになるのである。そんなわけではない。日本の男は西洋の男よりも非好戦的で優男（やさおとこ）でよいのである。君主制としては極めて手弱女ぶりの君主制であるがゆえに、君臣である日本の男たちの誰からも倒されず、天皇制なる王朝が続いているのである。

しかし、三島にとって日本の男のデリカシーは、結局のところ文化天皇の価値に結びついていなければならなかった。男の行動が良いか悪いかは、天皇の文化的・神格的価値に照らして良いか悪いかでなければならなかった。従って、自衛隊に決起を求めることは、三島にとって最高のデリカシーであった。

九鬼周造は、着物の色使い、湯上り姿における気配り、薄化粧、見え隠れする素足などにおいてその人の媚態的な意味でのデリカシーが表れると考えた。「言葉遣い」は、人のデリカシーの最たる判断材料である。「馬鹿野郎」を「おバカさん」と言ったり書いたりするのは浅いデリカシーに過ぎないので、正直に「馬鹿野郎」と言った方がましかもしれないが、語と語の過度に緊密な関係、文と文の異様な緊張関係を解きほぐすということも、また日本語におけるデリカシーの一つのはずである。三島の文体は逆に、散文学であるにもかかわらず、モーラ数・音節数の限られた和歌・連歌などの定型詩を書いているのかと思えるほどに、異常なまでの語と語、文と文の「テンション（張り詰めた厳しさ）」を志向し、実践した。三島文体は、美的興奮を挑発することはできるが、読者に対するデリカシーのある文体だということとはできないだろう。

九鬼は、湯上り姿について、「裸体を回想として近接の過去にもち、あっさりした浴衣を無造作に着ているところに、媚態とその形相因とが表現を完うしている」ところに「いき」があると説いた。だが、三島の思うデリカシーとは、ボディビルで鍛えた三島の肉体が女性の「いき」な想像力を封殺しなければ乱発もしきれない程度に、着物か、或いは軍服か楯

の会の制服で隠し気味にしておくのではなく、相手が男であれ女であれ、脱ぐこと、露わにすることであった。

三島の肉体を見て「キヤー」と黄色い声を上げるような女は、三島が言葉の上で書いているデリカシーのある女に該当しないにもかかわらず、三島は自分が脱がなくても日本女性を感じているはずの「いき」な美意識を全く信じていない。極めて不幸で寂しいことではないかと私は思うが、三島の言う肉体の理想とデリカシー論を突き詰めれば、肉体を鍛えた男から急に陰茎を見せられたときに怖がって大声を上げて驚くのは野暮であり、「いき」な感じであしらって「あら、まあ」と言える女性が最高のデリカシー女性ということになる。

何度でも言うが、三島が言葉の上でのみ女（特に主婦、女子学生、旺盛な性によって男を上回ろうとしている強欲女性）に向かって描いている日本の男のデリカシーとは、九鬼周造の「いき」やその他の江戸の男の「いなせ」や「優男」とほとんど同じであり、日本の女に求めるデリカシーも、昔ながらの控えめでしとやかな淑女である。

三島にとってのデリカシーのある、デリケートな女は、永遠に三島の肉体鍛錬と自決に全面的に賛同することはないかもしれない。なぜならば、三島はデリカシーがあったのでなく、ナイーブだったからである。三島が好んだのは、デリカシーのある女というより、ナイーブで病的な女であり、男が脱ぐ上着をさつと受け取るような家政婦的淑女でなく、美に突進したり、陰茎崇拜したりするような女であった可能性が残される。自分が日本語で女に向かつて書く理想の女と、自分が欲する女とが異なり、引き裂かれる原因には、三島と母の遠い関係、母の愛の不十分と、父の息子に対する無理解があったと私は考える。特に、父・平岡梓は、祖母・夏子が三島と母の親子関係を飛び越えて三島に関与することに厳しく物申すどころか、放置している。もし三島が、母からの愛を受けて育ち、やや病的に危ういものの適度にデリケートな淑女を好んでいたなら、緊張感を和らげた文体で、自決しないままで、女性向けの文学を書き続けただろう。

私が和歌を始めてから最初に発見した「いき」は、水無瀬恋十五首歌合における後鳥羽院や藤原俊成や九条良経や藤原定家・家隆らと、藤原俊成女や夭折の天才女流歌人・後鳥羽院宮内卿との間にあるそれである。前者は概ね二十代〜四十代、宮内卿は十九歳であるが、日本の男女間の「いき」は、和歌の歌壇で既に見事に存在したのである。

## 男とは（五） 男と愛について

私の郷里である吉備（岡山）の古神道研究の関係で、巫女・シャーマンからアトス自治修道士共和国の話を聞いたとき、男の恋愛と、男の性愛と、一人の女に対する男の愛と、聖母に対する愛とが、全て原理的に同格であり、かつ男の中で一致していなければならないことを知った。知ったというよりは、真の男の愛というものがあるとすればそういうものであるうと考えていたし、この特殊な女人禁制共和国のように、女なき聖地の男は皆この考えのもとに同地に足を踏み入れるのだとも分かっていた。



そこで、この私も、危うくアトス自治修道士共和国関係の日本修行僧として巫女から（冗談か本気か）推薦されそうになったところを、頑なに断つて無事に今のまま俗世での生活に至るわけだが、当然、この共和国の男たちの性行動というものが一体どうなっているのか、関心が湧かないはずがない。これについては、現地や欧州の西洋魔術の巫女・シャーマンから先の吉備の巫女・シャーマンに共同秘儀の機会や不定期の報告があり、私がその日本側の巫女・シャーマンの知人であることによって、ある程度は私も分かっている。

正確には、女性をしょっちゅう目にしてはいるが女性に触れない男、幼少期に女性を見た経験はあるものの以後は女性を見ないようにしている男、生涯一度も女性を見たことがない男（実母や姉妹は少なくとも目にしてはいるはずで、やや誇張だろうが）の概ね三分類に分かれるようだが、私でさえ随分と格の低い分類に推薦されそうになった。街中で母親に似た女性を見て思わず振り返った、といった私の日常行動でさえ、ここではほとんど世俗的ジョークの域であるようだ。修道士らには、実母への思慕は並々ならぬものがあるようだが、いずれにせよ、唯一の母（自分を抱擁してくれる母）かつ架空の性行為の相手は生神女マリア（聖母マリア）のみ、つまりは架空の性的儀式を繰り返すことによって本気で戦争が終わったり、プーチン政権の暴走やイスラエル・ガザ情勢が安定すると信じてやまない聖人・超人たちの半島なのである。

ちなみに私は、この聖人たちの営みの効能を本気で信じる人の一人である。こういう妄想でもしなければ争いが終わらないからでなく、現代においても一夫一婦制どころか一夫ゼロ妻制、性交渉もないという状態を徹底する男たちのすみかがあることは、墮落したキリスト教に残された唯一の良心である。安倍晋三元首相の銃殺事件によって、昭和の一時期以来再び話題になっている、北朝鮮出身の教祖が立教した韓国の宗教団体・世界平和統一家庭連合（旧統一教会）の聖典『天聖経』は、朝鮮半島が男性器で日本列島は女性器だと謳っている。その列島の最も凹んだところにある新潟県こそが、最多の拉致事件発生地域であることは言うまでもない。正しかろうが誤っているように、一人の男の言い分は、地球科学の知見、プレートテクトニクスをも否定でき、或る男を創造主であると信じさせることができるのである。ならば、生神女マリアを唯一の架空の性愛と思慕の相手として平和を願う良心が、害のある妄想であるはずはないだろう。

アトス自治修道士共和国と男女の立ち位置を反対にする、つまり男子禁制の巫女の儀式に限ると、いわゆる「白羽の矢が立つ」という言葉の由来になった儀式がそれである。天変地異や戦乱が起きたときに、或る一家の処女を儀式に参加させ、荒ぶる男神を平穏にさせることで世を平定するのである。

三島が真の男の愛というものについてどう考えていたかを探ると、最後にはかなり誤解・曲解された阿頼耶識的な愛、つまりは相手が男であろうが女であろうが、またプラトニック・ラブの意味だろうが性愛の意味だろうが、仏教の原義としての「愛着（あいじやく）」つまり執着の意味となり、どうせ執着するなら唯一の執着相手が天皇であり、運命愛（アモール・ファティ）は天皇愛であるということになる。だから、三島の場合は、一人の妻がい

ながらにして他の女に性愛的意味で興味を持つことの是非などの問題は、意外に簡単に片付くのである。三島は石原慎太郎と違って、天皇愛を無視して妻以外の女に手を出しまくったりしない。

ところが、三島の場合、一応のところ異性愛を維持し、一応異性に対するものとしてのみの陰莖の能力を保ちつつも、いざ天皇との男色行為の場が冗談でも提供されたとしたら、いとも簡単に天皇と性的に関係してそれを妻や一般の女たちや楯の会メンバーらに誇示した可能性はどこまでも残されるのである。アトス自治修道士共和国の修道士らの聖母観・女性観に、三島は別のルートで達することはできるが、それは三島の美的性行為の協働制作者（三島とベッドを共にする相手）に女性以外をも想定しているからで、例えば後述のインセルの苦しみというものには、三島は疎かった可能性がある。

## 男とは（六） 男のセンチメンタリズムについて

私が人生の早期から最も好きになったセンチメンタルな男・藤原定家に、三島は人生の最後に興味を持ち、書きたいと思い、そして書かなかった。三島の知らない私の一方的な感懷だが、このことは、私にとっては謎でありショックであると同時に、なぜか喜ばしい気分にもなるものだ。私が自殺しない男であることが確定すると共に、大文豪が気付かないことに巷の一介の男一匹が気付くこともあることが私自身に分かるからだ。

三島が『豊饒の海』の次に藤原定家について書こうとしていたことには、私個人として極めて感銘を受けると共に、結果的に叶わず残念なことでもある。藤原定家は、世の中では小倉百人一首の撰者としてのみ知られているであろうが、自ら撰した『新古今和歌集』や『新勅撰和歌集』のみならず、私家集『拾遺愚草』を読むに、当代の貴族男子の中でも、いや日本の男の中でも、私が思うに、最もセンチメンタルな男の一人である。

それで私は、藤原定家の数々の歌を座右の文芸とし、その父・藤原俊成の幽玄の歌についても同様で、今やこの平安末期から鎌倉初期の父子を私の父と私の関係に重ねて生きているほどであるが、三島は俊成・定家の幽玄・有心の歌道の心を取らずに、自衛隊に檄を飛ばす道を選んだのである。このことばかりは、私の中では日本文芸史上最大のショックである。

俊成・定家父子や、藤原氏の当主・九条（藤原）良経、彼らの歌仲間である藤原家隆らが、源平合戦に直接関わらない悠々自適の貴族であったにせよ、彼らの歌壇で展開された日本の深遠なる幽玄世界に三島が遂に戻ってこなかったショックは、授業で和歌を教える身としてもかなり大きい。後鳥羽院、そして、微妙な関係になってもおかしくない武家、特に源氏（源通親、源通具、源実朝など）とも、結局は共同で素晴らしい歌壇を作り上げた彼らのことである。三島の目に留まらないはずはなかった。しかし、三島は定家を書かなかった。

同じ現象は、川端康成にも見られる。川端は、次に東山文化、つまりは茶の湯や銀閣に見られる侘び・寂の萌芽の時代を描こうとしたが、ガス自殺した。三島が、華々しく勝利した北朝と足利氏の有頂天の名残のある華麗なる北山文化（金閣に象徴される）を選び、その直

前の暗澹たる時代に展開された俊成・定家を発見しながら直後に無視して自決したこと、川端が、ノーベル文学賞受賞前後から発見していた東山文化の枯淡の境地を書かずに自殺したことは、全くの相似形に私には思える。このことは、私には非常に不満であり、私ならば、なお生きて俊成の幽玄、定家の有心、龍安寺石庭、雪舟の水墨画を見たいと思うのである、日本の男の幽玄・枯淡のセンチメンタリズムには何ら恥はないと思うものである。

これはIQの高さから来るのか何から来るのか、大文豪の先見性は天才的である。川端のノーベル文学賞受賞が決まった際、川端、三島、伊藤整の鼎談で、実際に川端は、次は東山時代について書きたいと三島・伊藤兩名に表明しており<sup>xviii</sup>、同じ時期に三島は、川端・伊藤兩名に言ったか言わないか、定家について構想を続けている。三島は、川端が書齋に向かうときの後ろ姿を「いつも俊成だと思っ



NHK特別番組「川端康成氏を囲んで」 出演…川端康成、伊藤整、三島由紀夫 一九六八年十月十八日 より

自分が先にノーベル賞候補になりながら、人生の師でもある川端が先に受賞した際の、三島の喜びぶりと、川端の手を無理矢理取って激しく揺らした行動が、私には見えていてもわざとらしく見えたのだが、最近ではこれは三島の戦略ではないかと思うようになった。つまり、川端がノーベル賞にふさわしいという三島による高評価は本物だが、(川端が懸念し、三島と伊藤整の目の前で一度は受賞辞退の可能性を示唆した通り、<sup>xix</sup>)西洋文学的世界解釈の最終到達点であるノーベル文学賞において、川端文学が英語やフランス語で読まれ、受賞した(してしまった)ことで、今後川端がどう東山文化の茶室の枯淡を書こうとも、日本語

そのものによって、海外に対してだけでなく自己自身に対しても、日本のセンチメンタリズムを書ききることは不可能になった。川端の書く東山文化は、必ず「ノーベル賞受賞者」の書くそれである。最高峰の日本文豪の置かれた現状がこれである。そこで、(日本語が宿るものの、日本語を超越した)肉体の行動によってしか、日本の男を示す道はなくなった。

三島にとって、川端のノーベル賞受賞は、極めて都合のよいものになった。川端の『眠れる美女』や三島の『仮面の告白』や『禁色』に見え隠れする優柔不断性を一気に解消できる機会(すなわちそれは、中途半端な、西洋趣味に行ったり来たりで日本の男になりきれない、結局は西洋白人男性の陰茎に自分が一番憧れているところの男である)三島が、文でも武でも川端に遠回しに勝利できる機会がやって来た。三島の自決は日本の男のセンチメントを絶対に甘受しない死であり、川端の自殺はそれに極端に殉じた死であったのだろう。

### 男とは(七) 能動的背徳行動としての一夫多妻と天皇

一夫多妻(一夫一婦)制は定期的に、或いは常にどの都道府県・市区町村でも、一定数の男において流行するようである。正確には、憲法違反となる重婚を回避する形で、あの手この手を使って事実上の一夫多妻を実現しようとし、実現してしまう男たちが出現する。「俺には多くの女がいること」は、男が「男らしさ(生殖能力という意味での)」を他の男や女に主張するのに、最も手っ取り早い方式であり、見方によつては最も幼稚で野蛮であり、前頭葉的知性から最も遠い、「大脳辺縁系・間脳の官能」だけあれば主張できる「男らしさ」でもある。

尤もここで「幼稚」や「野蛮」と書いたのは、近現代キリスト教および大正天皇以降の天皇の御代下における言い方であつて、未開民族および多くの霊長目は、自らの一夫多妻を幼稚や野蛮だとは考えない。鳥類などほとんどが一夫一妻制を採る動物群もいるが、我々サル仲間においては、一夫多妻の常識と一夫一妻制の珍しさが目立つことは否めない。一部には、例のジャニーズ問題のように、老人男性が若い男子を集めて一夫多夫帝国を作り上げた例もあり、似た例は戦国武将による小姓の重用などの時代からあるにはあるが、これも結局は威張りたいたオス(とその陰茎)が他のオスを威圧し、性行為や政治の舞台における主導権・発言権を封殺している点で、根は似たものであるようだ。

このサル世界におけるヒトの一夫一妻制の非常識さは、何が何でもこの世で一夫多妻を目指す男たちの「間脳の官能」の正当性の主張の口実として、よく用いられる。最近では、都知事選において一夫多妻の是非が争点になったことがある。大抵の高齢者や団塊の世代、今の四十代あたりまでは、何と愚かな候補者が出てきたかと思うであらうし、その口実に呆れ果てる女性も多かったが、若年者においては現職の小池都知事と蓮舫氏よりも得票数が多かった。少子・高齢・晩婚・未婚化社会においては、籍を入れない一夫多妻的な男女関係の志向は珍しいものではなくなっているようだ。

新宗教ブームやオウム真理教の一連の事件の名残もあり、つい最近までは、一夫多妻男は

即ち単に新宗教の教祖か、女性を洗脳する自称占い師か、その手のペテン師に過ぎないと思われるに違いない。事実、ちょうどこの一月に、三島の生誕百年記念と入れ替わるように自殺した東大和の一夫多妻の被告男性は、女性に占いをやってみたところ偶然簡単に複数の女性たちが寄ってきたので、占い師を自称するようになった人物であった<sup>xii</sup>。その少し前には、「イエスの方舟」といって、これまた一人の男が（しかも、決して一般のれっきとした社会人・サラリーマンにならないから宗教に走ったといった軟弱な性質でなく、極めて横暴な性格の男が）多くの女性を囲っていた信仰集団が話題になり、最近では若者による一夫多妻コミュニケーションへの多様な（半ば肯定的な）興味もあつてか、若い監督により映画化もされた<sup>xiii</sup>。いずれも、ほとんどの女性が強圧的に丸め込まれたのでなく、自ら多妻を成して男性のもとに飛び込み、同居するようになり、マスメディアに対して一家の主を守る言動を繰り返していた点は忘れてはならない。

この一夫多妻の発想は、今の二十代を中心に若年男性にも、そして驚くべきことに若年女性にも一定以上の人気があり、一夫多妻生活を配信しているYouTube<sup>iv</sup>までいる。それぞれの「家庭」が寂しく演技でやっているわけではなく、数万〜数百万人のチャンネル登録者数を抱える有名配信者らが積極的に実生活として配信し、莫大な収益を得ているものである。むしろ、（子どもが欲しいからではなく）出産や子育ての配信とその収益自体を目的として多くの子供までもうけているのである。

三島の生きた時代は、大正天皇のあまりに素直すぎる一夫一婦制の導入によって大正・昭和の男たちが側室・妾を諦め、のちに一夫多妻がカルト概念として復活するまでの、ちょうど休閑期にあたる。一夫多妻が駄目になったので、SM雑誌やオカルト雑誌、男色共同体など違った背徳行動が勃興したわけだ。従って、それらは、西洋から見れば中途半端なロマン主義、いわゆる大正浪漫からエロ・グロ・ナンセンスまでの日本独自の官能を発露している。

三島が天皇を志向すればするほど、三島としては一時期、サノオの女神・機織女に対するSM行動、インセスト・タブーの侵犯を肯定せざるを得なくなったが、三島には一点の逡巡があつたようである。それで一夫多妻を称揚することは遂になかった。未開古代文明におけるホモ・サピエンスという「種」の絶滅の危機迫る一夫多妻と、朝鮮特需で有頂天になった後の日本のカルト一夫多妻は、全然違うものである。大正天皇は、一夫一妻を選択することで、黄色い肌の人間には一夫一妻制が分からないと信じているキリスト教列強国から、古代天皇を守つたのである。三島ものそのことを分かっていただろう。但し、三島が自決せずにYouTube時代も引き続き生きていたなら、喜んで自らの肉体の映像を撮らせ、大勢のゲイの人たちや女性たちに向かって配信したことだけは間違いないだろうが。

## 男とは（八） 能動的背徳行動としてのインセル

男というのは全員が変わり者であることは三島自身も『第一の性』で認めているが、今一度、本論での男女観を振り返り、ここに「変わり者」を照らすと、そもそも「唯一の、通常

の、完全に神が創ったシンメトリーなる、わざわざ「性別」などというタームが無用であるところの、女」の遺伝子が、何らかの天変地異を受けて形が変わり、あくまでも光の三原色で見たところ一つだけ違う形をしている染色体を取り敢えず持っているらしい生き物を「男」と名づけたのであるから、男が全員変わり者であるのは当たり前である。この視点がボーヴォワールと三島の時代の科学とフェミニズムに全く欠落していることは、前にも述べた。

では、「日本の男とは、我々が日本の男と思うところの有機体に過ぎないことが、最新の遺伝学・分子生物学で判明した」などと言ったところで、ジェンダー自由、性転換自由の現代ばかりがよい時代ではない。

三島の『第一の性』だけでなく、三島が全く題材にしていない男性像に、欧米の女性らが名づけた「インボランタリー・セルベイト（非自発的不淫者）」がある<sup>xxiii, xxiv</sup>。略して「インセル」や「インセルベイト」と呼ばれる男性の一群で、「異性との交際・結婚のない期間が長期間にわたり、それらを諦めていながら、全ての男に女が平等に与えられるべきだと考え、交際・結婚状態にある男女への憎悪（特に女性へのミソジニー・女性蔑視）や社会の不平等への反感を持ち、カップルや夫婦を襲撃することのある男性」とでも定義される。前世紀から萌芽が見られるが、研究・統計上インセルが原因と推定される襲撃事件は二〇〇〇年以降になって急に多発しているのだ、三島が知るよしもない男のタイプである。例えば私は、異性愛者の独身男性であるが、独身に何の悔いもなく、街を歩いていて幸せそうな夫婦を見て嫉妬し襲撃しようと考えたこともなく、女性を憎むどころか依然として女性は好きであるので、インセルの要件には当てはまらない。

今、欧米G7諸国でこのインセル事件が多発しているので、研究者や社会学者らが必死になって食い止めようとしているが、来たるべき「独身男性の勝利世界」への予言や反出生主義、キリスト教神秘主義とも関係しており、全く止む気配がない。特に英米カナダでは、数年内にインセルであるローンオフエンダー（単独テロリスト）によるフェミサイド（女性殺し）が同時多発的に起きると考えられている。二〇二一年には、イギリス内務省がインセルを「数年以内に過激化する恐れのあるカテゴリー」に認定した。日本において、インセル事件と断定できる事件が既に見つかるとかどうかは定かでないが、欧米では女性の裸体や女性との性行為に興味を持っていて暇がないほど趣味に没頭している男性は自発的・能動的独身者であること、つまり攻撃的インセルでないことが分かっている。これは、DIYなどの物作りや、音楽や、鉄道趣味に没頭している男や、話の通じない生身の女性よりも優しい二次元の女性キャラクターの方が好きな男なら、自ら健全なインセル非該当者であることを容易に実感していることだろう。こんなことは私が書かなくても自明のことだが、欧米ではインセルだろうとインセルでなかつたら、彼らはいとも簡単に一神教の神を志向する。

ならば日本のインセルの男（つまり、趣味に生きるよりも、街で見かけた仲の良い男女への憎悪に生きたい男）は何をもつて心を慰めるべきか。真の童貞喪失の性行為は狩りの前か特攻前夜かに行うべきであるとする三島の論は、一見格好良く、実際にそれを『行動学入門』

で女性に向けても言ったのは実に格好良いが、今それを言って聞くカップルはいないだろう。三島の『第一の性』や『行動学入門』は、一歩間違えばインセルの書である。しかし、その時点で三島が古代天皇から近代天皇までを俯瞰していたこと自体は大きい。

言うまでもなく、天皇の一夫一婦制は、半分は大正天皇の自発的意志によって始まった。大正天皇自身が明治天皇の側室の子であったが、その父以前のほぼ全ての天皇（当然、夭折した天皇を除く）に側室がいたことについて、大正天皇はほとんど不満を示さなかった。自分に側室や浮気相手がいないことについて「文句」の有無を考えること自体がインセル的発想で、大正天皇は、（体が弱かったこともあるが、）側室を持つとしなかった。日本の男の一夫一婦制は、天皇から始まったのである。換言すれば、日本の男の不道徳やインセル的暴走を統御できる存在は、日本には天皇しかない。

もし日本の男が一夫多妻を繰り返していたら、低知能の野蛮民族国家として欧米列強の植民地になったことは自明である。「性」ということに関しては、大正天皇は時代を正しく見た男であり、英雄であった。その一夫一婦制を継承した昭和天皇も、上皇陛下も、今上陛下も、日本のおよそ六千万人の男の性をコントロールしている点で、（今や古語で詠まれない歌会始の御製などよりも圧倒的に、性的な意味で）紛れもなく英雄であるとは私は思う。

先述の性的逸脱者・荒くれ者としての一夫多妻論者および実践者は、なぜ「普通の」マジョリテイの女性から見て変だと思え、そんな男の「妻」となる女性をほとんどの国民は変だと思うのか。先に述べたように、悠久の哺乳類史・人類史を見れば、一夫一婦制の方が極めて性的に異常な行動であり、反自然であり、環境保護どころか種の保存に敵対する自殺行動である。すなわち、自然征服を繰り返してきた欧米列強がキリスト教的価値観「聖なる性」の平等主義として一夫一婦制を思い付き、これを野蛮国家である日本にも持ち込もうとしたとき、日本列島の大自然・四季折々の姿と並んであった一夫多妻制を無理矢理に封じ込める神格を持った存在が、日本においては天皇しかないなかった。

大正から令和の今、一夫多妻を変だと思える心の背後には大正天皇の神格があるにもかかわらず、それを理解できるのはインセルのような変わり者の方で、ほとんどのカップルと夫婦は理解していないという大問題がある。三島は最も早くこのことに気づいた珍しい男である。昨今の日本にも間違いなくインセル事件が起きる土壌は整っているのであるが、男系男子天皇が途切れるおそれがあるにもかかわらず、しかも保守強硬論者の中には側室設置の圧力をかける者がいるにもかかわらず、今上陛下は雅子妃殿下を生涯の妻だと考えてやまない。悠久の神武皇統の途絶よりも国民の男女の平穏と平等を志向している。

ここに私は現代日本に最もふさわしい天皇の最上級の英雄性を見るのであるが、三島ならどう見るであろうか。もし三島にとって神武皇統の途絶への危機感から来る天皇や皇嗣の性行為が、特攻前夜の兵士の性行為を上回る価値であれば、天皇にのみ側室設置は許されることになる。しかし、妻が二人以上いなければ、浮気しなければ、自分も妻も日本国民も滅びると思えるような特攻前夜の性行為は、ほとんどの家庭のベッド上にも、もはや存在していないのではないか。

## 男とは（九） 男の色気について

男の色気というものが、その男自身が自分に対して主張するものであるのか、色気のある、または色気のない女がその男に対して認めるものであるのか、はたまた他の男が認めるものであるのか、という問題があるが、実際のところはそれら全てが欠けてはならないものだと思う。そのことは、私に限らず、三島自身も薄々分かつてはいたのだが、三島は自らの肉体が他の男のそれと比べて色気に欠けるものと思える強烈なコンプレックスがあったらしく、本来彼の純文学に色気を出すことに邁進すればよいものを、色気を何らかの気配や気品と解釈せず、筋肉の視覚美と考えてボディビルに走ったのである。これは、何度でも書くが、最終的には他の男の陰茎よりも自分の陰茎を立派なものだと主張したい心に他ならず、しかし、生まれ持った三島の体格における陰茎の体格は容易に想像ができるので、勃起という不随意的自然現象を刀という随意的行動に肥大化して置き換えることを思い付き、市ヶ谷に向かうことを決めたというのが、私の見立てである。

和歌愛好家の私が考えてみれば、およそ和歌文芸に表れている日本人の官能というものは、第一義に極めて触覚的なものであり、異性に「逢ふ」ということの中に性的接触の含意がない恋の歌など存在していない。これは、何も平安貴族の雅な余裕のある男女の恋文化に限らず、江戸時代の混浴文化とて同じことであり、盆踊りでさえ元は性的接触の可能性のありそうな異性を探するための祭であって、古代の歌垣と何ら変わりはないのである。

ところが、文明開化にあたっては、圧倒的に視覚・聴覚、とりわけ視覚優位の文明である（それどころか嗅覚や触覚を五感のうちで低次のものと見なす）西洋文明の視線に対して、日本の恋を日本の恋のままで先進的な恋と見せかける必要があった。この際に九鬼周造が記した『「いき」の構造』などは、異性との直接的性交渉を見据えつつも、その手前の（異性を見かける、挨拶する）段階における間接的性交渉に美意識があるのであり、その官能性は、奔放な性の反動で禁欲社会になった西洋を越えた美意識でさえあることを示した点において、優れた著の一つであると思う。

九鬼は、「いき」の定義について、異性への媚態（それは裸体に限らず、仕草、着物の着こなしなどから茫漠と感じられるものである）が武士道的意気と仏教的諦念・恬淡の境地に自由に生きている姿であるとした。三島の「三」に掛けるわけではないが、三島にも九鬼の言う「いき」な男の三要素が備わっていないわけではなかっただろう。しかし、三島の本来の自然な官能美は、生まれ備わった弱小肉体から生み出す純文学（言葉の豊饒な肉付け）であったにもかかわらず、筋肉美であると考えるに至ったし、武士道的な意気地とは実際に刀を振るうことであると九鬼の意図を誤認し、仏教的な諦めもなかったがために市ヶ谷に向かった。

『豊饒の海』は唯識論の書とされるが、元来は最深層にある阿頼耶識でさえかりそめの自我である識が認識しているに過ぎない浅い層であり、最終的には空論に前戻る可能性を唯



識論自体が認めるものであつて（真の無・非の層は仏の無我・非我にしか分らない、阿頼耶識でさえあるかないか分らないの意）、唯識論を仏教のゴールにした時点で三島は仏教的な諦念を曲解か誤解しているのである。とりわけ三島は、自らの輪廻思想の未熟さを自覚して仏教の入門書を読んでいるうちに、自分の求める仏教が唯識論にあることを発見したと述べているのであり、唯識論自体というより、元は輪廻転生説を補完するための方便としての唯識論に興味を持ったようである。従つて、九鬼の言うような、「いき」の一部を構成するものとしての武士道的意気と仏教的諦念に三島が行き着くことは困難だったと考えられる。

先にも述べたように、「オス」や「男」の定義が肉体の屈強さとは無関係に展開されているのが昨今の自然科学である。三島の時代でさえその萌芽がある。陰茎・辜丸・精巢の大きな無精子症の男もいるし、それらが短小でも驚くべき繁殖能力を持つ男がいることは、科学者の男たちにとっては常識である。そもそも、切腹するのに最も都合のよい刀は短刀であり、長刀の太刀・打刀や脇差がふさわしいわけがない。憂愁と不安ばかりにとらわれたキルケゴールや、三島が勝手に「なよっ」とした女々しい男だと見た太宰治も、男は男なのである。しかし、三島の論理では、やっぱり筋肉の凄い男が凄い。陰茎は大きな方がいい。胸の大きな女がいい女である。肉体を飾り、飾らせたがる点は、雅語を乱発する彼の作品と同じである。

三島の持つ日本人の肉体観は極めて人工的である。純文学を書けばよいだけの脳や心臓や手足や筋肉や胸の大きさがあればよいとする東洋医学的汎神論観が感じられない。にもかかわらず、『不道德教育講座』『反貞女大学』を書いたのはどういうことだろうか。平岡瑤子という女性を選んだ必要性が、三島の肉体観や女性観からはほとんど分からない。（私は、平岡瑤子の弟のご夫人と仕事上の交流があるが、この話題は恐ろしくて尋ねる気にならなかった。）

三島は、自らの人工的な文体、というよりは人工的な美意識を棚に上げて、それらの人工的な傾向を、横光利一や川端康成に見ており、とりわけ横光利一については西欧化を見て、川端の方を官能・エロティシズムの効用と法則に忠実であったと見たが、これは本当にそうであるかは怪しいのである。三島の方が、彼らよりも、銭湯に浸かる日本庶民の短足の肉体でなく、聖なる白いヨーロッパの人間の肉体に憧れたのではないか。

#### 男とは（十） 男の悟りについて

三島は文体（言葉）を世界解釈の道具だと考え、とりわけ『豊饒の海』を世界解釈の小説であると位置付けたが、長年、私のように和歌をやっていると（鑑賞と歌作の両方）、三島の文体がいかに日本古語の法則に従わずに西洋語的に世界解釈を描いてしまったかが分かる。

「秋風が吹く」というのは、本来は「秋の風吹く」や「秋風吹く」や「秋風ぞ吹く」とし

か言えない。三島は「秋風が吹く」と書いてしまう作家である。三島は古典に詳しい作家だ  
と思う人がいるだろうが、三島の言語認知方式は全然日本語的でない。嘘だと思って、今『万  
葉集』や『古今和歌集』を紐解いてみるとよいだろう。

どうということかと言うと、主体が主格という人格を持つて主語を表すところの標識（日本  
語では「が」。英語をはじめ西洋語では早くから主格の要素が名詞自体、例えば「I」に吸  
収されたため、「I が love を you.」でなく「I love you.」で済む）は、行動の主体と客  
体の峻別を強要される文明状態、すなわち農耕の定着後、殺害を伴う戦闘が国中で展開して  
いる社会と時代にしか発展しない。事実、「が」は鎌倉時代から戦国時代にかけて急速に出  
現するようになった。目的格の「を」も当然同じで、「が」とセットで戦乱時代に発展した。

これは日本語のみならず、同じ膠着語である韓国語やモンゴル語やトルコ語でも、群雄割  
拠の時代に主語と目的語の明示方式が強固に確定してきた。「俺がお前を殺す」のか「お前  
が俺を殺す」のかをはっきりさせるべき時にしか、主語や目的語は必要ないのである。つま  
り、西洋文明において、名詞を発言しただけで、語の位置関係によつて「が」の意味か「を」  
の意味かが分かるということは、西洋は自我と他我を常に競わせる文明だということであ  
る。これは別に私だけが唱えている新たな言語学ではなくて、文明化が遅れた民族言語ほど、  
主語と目的語が曖昧なのである。

三島の文体は、緊張感が特徴だとか、美文だとか言われるが、そういう印象論で済ませよ  
うとすると、まるで美しい日本を描けたように錯覚するのであるが、三島の文体の実相を言  
うならば、西洋語と相性がよい文体だと思う。これは川端康成の文体よりもその特性がある  
と思う。

私は「秋の風吹く」や「秋風吹く」や「秋風ぞ吹く」を、「秋（の）風が人間に吹き、秋  
（の）風を人間が吹く」としか訳せないと主張してきた。日本古語では能動態や受動態より  
も中動態が圧倒的に優勢である。今もこのことが分からない万葉学者や和歌学者が教鞭を  
執っている。藤原俊成の「野辺の秋風身に染みて」や藤原定家の「身に染む色の秋風」は、  
「秋風が人間の身に染み、人間の身が秋風に染みる」ことの表現だと考えるのが正しい。「が」  
や「を」が抜けていると考えて、「秋風が吹く」とだけ補って訳す和歌学者や言語学者の読  
みは、文献の見方を分らないまま行っている事実上の改竄になってしまう。その態度で万  
葉歌を解釈すると必ず失敗する。三島という男は、そこまで和歌の無理解者ではないが、筆  
致を見ると、かなり危ういところを行き来している。古代人間の感性を知るということは、  
彼らが遺した言葉に勝手に何も付け加えず、何の省略もしない態度のことだ。

この考え方は、主格や目的格とは異質の能格や活格といった格を立てる論者の間では何  
ら珍しいものではないのだが、三島は簡単にはこれを認めないだろう。鉄筋コンクリートの  
ような剛構造で保たれている三島の文法を崩すと、雅語と雅語の緊張が忽ち崩壊したり、男  
が膝から崩れ落ちるが如く厳格さが瓦解するので、三島は日本語、更に言えば、ひらがな  
でさえも、忌み嫌う可能性があったと思うのである。三島文体の着飾り方というのがいかに  
人造美の超絶技巧であるか、特に和歌という古典の観点からは、秋風のように身に染みて感

じるのである。

三島文学は「が」と「を」の文学である。伊藤整が三島文学よりは川端文学が「日本文学の中でも」一番分かりにくい」と言ったのは<sup>xxv</sup>、起承転結の曖昧な構成のみならず、セックス(文)自体の日本固有性・和歌性が川端の方にあると言ったようにも私には聞こえる。

「I was born in Japan.」は「by the God」の省略、つまりは「神が生んだ」か「神によって生まれた」かしかなり得ないのが西洋語であるが、日本語の「生まれた」は、先進印欧語族の主客分離つまりは能動態・受動態の発想の転用である「受身」では片付かないので、「自発」なる概念が設けられている。古語には「生まる」があったが、日本には「八百万の神々と実母と胎内の子の阿吽の呼吸で生命は生まれる」という感覚だけがあって、誰かが誰かを生むとか誰かが誰かによって生まれるという自然観と世界解釈がないものだから、近代では無理矢理に西洋語文法に合わせようとして「生まれさせられる」という訳まで登場した。これに飛び付いたのが詩人・吉野弘で、「I was born.」なる作品を書いているが<sup>xxvi</sup>、これを道徳教育に使えると思った小中学校の教員たちの解釈を見てみると、「君たちの命は受身なんだ。命は受身で生まれる。生んでくれた母に感謝しなさい」という極めて短絡的で浅はかなものばかりだ。この作品の冒頭は「確か 英語を習い始めて間もない頃だ。」である。日本の少年の自我が英語文法によって改変され、生命解釈・世界解釈が変わる過程をとらえた詩であるのに、「頂いた命のありがたみ」にすり替えている日本の義務教育の愚かさを見せつけられる。

このような解釈は、万葉時代の助動詞「る・らる」を「受動態」標識と誤認する日本の言語学者らの失態に起因している。本来はあくまでも「自然」・「自発」つまり「おのずからしかるべくある神々と人間の協働」を意味する文法標識であって、「が」と「を」の頭脳で万葉集を読もうとしたら、英語で万葉を読んでいるのと同じ、つまりは三島の和歌観になるのである。日本の男の悟りは、主格と目的格の和歌的な解消、雲散霧消にあると私は考えるので、三島の定家観に一定以上の引っかけりと不満を禁じ得ないのである。

## 男とは(十一) 男と文明について

三島は、東大全共闘との討論後、実は彼らが何を言っているのかほとんど分からなかったという旨を述べたが、これはあまりにサービス精神が旺盛すぎる嘘だろう。勿論、全共闘側、特に芥正彦などが、学んだばかりの哲学用語を無理矢理に並べ立てて三島に食ってかかっているふしもないわけではないが、そうかと言って三島と全共闘の間に話が成立していないわけではなかった。但し、三島が「天皇を天皇と諸君が一言言ってくれば、私は喜んで諸君と手をつなぐ」と言った通り<sup>xxvii</sup>、肝心の天皇観・文明観が根本から異なるだけである。

全共闘、芥正彦の言う「持続」は、ほぼベルクソン、ドゥルーズ、メルローポンティなど仏哲学由来の真似事である以上フランスの匂いはするが、事実上、無国籍的「純粹持続」である。だから、三島の言う「足の短さから逃れられない日本人の」運命は、全共闘には頓珍

漠に聞こえるし、ほとんど本能的に「日本人の足の短さ」を笑ってこそ前進している欧米文明の怖さを無視している。



GAGA 「三島由紀夫VS東大全共闘」50年目の真実」 二〇二〇年 より

ところが、三島の「持続」は必ず天皇を含意するものであり、日本においては「天皇制」が「純粹持続」するのでなく、「純粹持続」の本名が「天皇」なのである。従って、自民党や共産党が同じものだとする三島の発言は、いかなる政権・政党も国民も「天皇制を認めた」り認めなかったりすることが原理的にできないほどの天皇の自明性」という確信から来ている。「天皇制」とは「する」ものでなく「ある」ものであり、「することにした近現代欧米の君主制や共和制よりも原理的に古代ギリシャ、イオニア哲学以前の人間の文明に近いものである。よって、「天皇」はベルクソンの「エラン・ダムール」が「エラン・ヴィタル」によって創造進化する「純粹持続」であり、日本の男どころか男一般の「運命愛(アモール・ファティ)」であり、古代文明は必ず「天皇的」である。私でさえ代弁できる三島の全共闘に対する主張の根底がこれである。三島が全共闘の難解な論旨が分からなかったというのは大嘘で、単に三島側の一匹狼の天皇論を分かってもらえないもどかしさと寂しさを隠そうとした発言ではないか。

ルネサンスが人文主義などに見なされることに是非の議論があり、今でもゴシック・リヴアイヴァル(ネオ・ゴシック)の動きや、日本ではゴスロリなどと言って若者のファッション文化にゴシックが盛んに取り入れられているが、そもそもこれは「ゴート人のような」という侮蔑用語である。但し、ゴシック・リヴアイヴァルは、ゴシックつまりゴート人の文化に無国籍的な、民族不問の人間文明の「純粹持続」の価値があるものと見てゴシックを復興しているのである。

そういう意味での、日本における古事記リヴアイヴァルは江戸時代に本居宣長ら国学者によって行われたわけだが、三島が要求した「万葉ギリシャ」は、最も激しい形で神武創業の日本・大和敷島の歴史をリヴアイヴァルしようとした復古運動だと私は考えている。

川端康成が心霊主義、神秘主義に心酔したのは知られるところで、私は『抒情歌』がその

川端の心霊主義小説の最たるものではないかと思う。この中で川端は、自分のオカルト趣味と精神の健全のバランスを頑張って保とうとしてか、亡き息子レイモンドの霊と交信したと主張して世間を騒がせたオリバー・ロτζジを敢えて登場させるなどして、靈感の強い主人公・龍枝を描いた必然性を補填しようとしている。

しかし、三島のオカルト趣味も相当なものである。川端康成どころではない危うさがあつたと考える。私は、明治の文明開化から大正・昭和の国家神道の捏造(事実上の神道国教化・国民道徳化)の際に、(元来はむしろ真正の神道・自然崇拜であるのに)真正の神道にあらずとされて神道界から追放された吉備神道・巫女神道・陰陽道・修験道、とりわけ吉備の秘教神道・神道霊学の巫女を研究してきた。やや秘伝奥義の教授も受けているほか、男の霊学家で言えば高浜清七郎、本田親徳、友清歆真らの吉備・山陽の霊字や宮地神仙道の精神の一介の継承者を自負しないではないが、三島も彼ら秘教神道・神道霊学家の影響を受けている。特に『英霊の聲』はあからさまである。これらの神道霊学では、天皇中心の国体護持と、日本の古代ギリシャ・原始キリスト教化(ニーチェ風に言えば、日本の「音楽の精神」化)とが矛盾しないと考える特徴があるが、三島も自決の舞台を、天皇万歳を叫びながら行うオルフェウス教やミトラ教の秘儀や、聖セバステイアンの殉教として演出しようと考えていたとしても不思議ではない。

これについては、飯島洋一も面白い考えを述べている。

三島が切腹を選んだのは、彼が近代の「生け贄」となり、近代と心中するためである。スケープゴートが行なわれることにより、王殺しが成就し、始原が回復される。伊勢が遷宮によって生まれ変わるように、天皇も生まれ変わる。「秩序」が保たれ、それによって「永遠のいま」は保障され、それによって、三島の自己正当化が真の意味で完成するだろう。その舞台として、これまでに述べてきたように、バルコニーという空間が供儀の場所として浮上する。(中略)この国の近代の始まりにおいて、天皇が「王殺し」をして世界を蘇生しようとしたが、三島は自らを生け贄とすることでそのことを行なおうとしたのである。<sup>xviii</sup>

尤も私にとっては、三島は古代の「生け贄」を誤解しているのであり、この矛盾点については富岡幸一郎も的を射た論を展開している。

ギリシア悲劇のディオニュソスのものに魅惑され続けた三島由紀夫は、実際には非ディオニュソスの、すなわち「本能が批判家となり、意識が創造者」(ニーチェ『悲劇の誕生』)であるソクラテスの要素を持ったエウリピデスから出発するほかはなかったのである。ニーチェが語ったソクラテス、「まさしく欠落から生れた怪物」こそ三島由紀夫の自画像であり、『仮面の告白』で“告白”された「人間ならぬ何か奇妙に悲しい生物」としての「自己」であつた。<sup>xix</sup>

三島がニーチェの『悲劇の誕生』に心酔し、古代万葉ギリシャの近代日本における復活を志向し、アポロ的なものとディオニソス的なものを後者優越において統合する道を模索したのは明らかだが、その道筋は、敢えて言うならば、オカルティズムの経緯を辿ることになった。

楯の会の特徴を挙げるなら、メンバーは約百名弱であること、リーダーの主導性がありつつも他のメンバーが信仰する新宗教・オカルト思想にリーダー自身が強く影響されて死の決心が固められていき（実際に、三島自身の神道霊学と生長の家などいくつかのニューエイジ教団の思想との折衷組織であった）、しかし最後にはリーダーがメンバーの中から死への同行者を選別したこと、一者（天皇）を守るために自国の政府・（事実上の）軍隊を守るところか、それらおよび他国政府からの襲撃・間接侵略をも想定し、最終的には来たるべき世界の墮落に備えた無国籍・無民族的布教組織の側面も持っていたこと、両性愛の三島を含めゲイのメンバーが多数含まれ肉体改造に邁進していたこと、リーダーおよび選ばれし死の同行者（側近）の自死後に組織を解体・消滅させるべきことを死の直前に構成員たちに命じていることなどが挙げられる。

これらと全く同じ条件を満たす集団はいくつもあるが、私がいつも思い浮かべる集団にはヘブンズ・ゲート (Heaven's Gate) がある<sup>xxx</sup>。異なる点といえば、三島が森田だけをあの世へ連れて行った（三島は自分だけが自決の英雄になろうとしたものの、逡巡する中、森田の「お伴したい」という強い要求を半ば口実に、森田にのみ死への同行を許可した）のに対し、ヘブンズ・ゲートの方はリーダーのアップルホワイトが最終的に全員に自決を命じた点で、死者数は大きく異なる。また、ヘブンズ・ゲートの方はほとんどのメンバーが楯の会メンバーどころではない強硬な古代宇宙飛行士説を信じていた点で異なる。ヘブンズ・ゲートの男たちは、宇宙への帰還準備のために、まずは悪魔的行為と信じた性行為を途絶させるべく去勢を行った点は異なる。だが、それ以外はほとんど同じ、リーダー二人のオカルティズム（神智学・霊学・予言）趣味と両性愛も同じものである。去勢の件も、元はアップルホワイトの同性愛の悩みに起因するものであった。当時は世界でも日本でもオカルトブームのさなかであり、その悲惨な末路の一つと言えるのが、ジム・ジョーンズなる男が率いた人民寺院 (Peoples Temple) の集団自殺事件だろう。彼らは、地上の共産主義の楽園ジョーンズタウンを建設した上で、ここに連邦政府や州による攻撃が入ると予想し、別世界への転生を図った。

三島と楯の会は、一歩間違えば、「本当の日本は天上界・霊界・宇宙のどこか別の場所にあつて、この地上界の日本は墮落した偽物である。従つて、いざれ自決して真の日本に異世界転生するために建造している宇宙船が楯の会である」という解釈を採り、民兵組織というよりも一種のオカルティズム布教組織に変貌してもおかしくなかったと私は考える。先の神道霊学の上に心酔した状態の三島単独では、（私も巫女の神道霊学思想を聞いて実感しているから分かるが）いわば「真正日本異世界所在説」の萌芽があるくらいで、集団自決の

発想まで生じたかは怪しいが、生長の家の万教一致思想を鵜呑みにしたメンバーらの同性愛的関係の中にあつては、内部で三島とメンバーらの共依存関係によって異世界転生思想が発展していても何ら不思議ではないだろう。

そもそも、楯の会に関係なく、三島と森田とで別々に自決すれば良いし（この点はやはり、万場世志治や須原一秀の単独者としての自決の潔さが目立つ）、二人の自決後も他のメンバーは別々に自決できたはずである。どうして男がずらずらとセツトで市ヶ谷に乗り込んで迷惑をかけなければいけなかったのか。もうその時点で、やや異世界転生色を帯びたオカルティズム教団の要素があつたと思う。さすがに奇説と思われるかもしれないが、アップルホワイトも最初は誰からも慕われた音楽教員であつたものの、自分の両性愛傾向に悩み始め、父の死や心の同志であつた看護婦・ネトルズの死後に、急速にメンバーらと共に異世界転生（真の宇宙への帰還）を目指すようになっていく。

最近、ライトノベルやアニメで異世界転生ものと呼ばれるジャンルが流行している。私の受け持つ授業の学生においてもそうである。三島は、通時的には記紀や万葉以前の時代に真の日本を見ようとしながらも、同時に共時的には異世界に真の日本の所在を発見しようとした。それだけ三島には戦後・昭和日本が馬鹿馬鹿しいほどに墮落したものに見えていた（或いは実際そうであつた）証拠であるが、その点は三島も川端も同じである。純粹な心で目の前の自国文明に絶望した男は、霊界だとか異世界だとか言い始める。三島は、異世界転生ライトノベルの愛好家や作家にネタを与えるには十分すぎるくらい、その先駆者であつたと言うことはできるだろう。

しかし、この時、絶対的安住の地、母という存在があれば、どうだったであろうか。私のように、宇宙と世界の基本とは、母・女であり、その宇宙自体である母・女の霊力を存分に活かすだけの父・男の存在である、と考える男には、多少の霊学の教養は必要でも、徒党の組織、生長の家のような教団からのニューエイジ思想の借用、および集団自決による霊界・天上界への旅の決行は不要であることも、三島を見ていてよく分かるのである。

梓は『仮面の告白』を何も分かっていないと言っている。もし梓が『仮面の告白』の内容をきちんと認識できる男であつたなら、この作品は平岡家にとって衝撃的な爆弾となつていただろう。三島由紀夫の〈割腹自決〉は回避し得たかもしれない。しかし、倭文重の言うように〈公威さんの悲劇〉は止めようもなかった。倭文重が「格式の意識の高い」平岡家に〈お嫁〉にきたところから公威の悲劇は始まつていたのである。xxxxi

更に三島には、本当の「父」がいなかったばかりか、「祖父」もいなかったのである。

公威にとって、祖母の周辺の出来事は祖母の言動とともに認識され記憶される。それは祖父についてもいえることである。（中略）そんな祖母からは、祖父の知事時代、長官時代の英雄譚など語られるわけがない。たとえ公威が祖父に関心を抱いたとしても、

祖父の名など話題に出すことも憚られたことだろう。(中略)

そのために、三島の小説における祖父描写は、借金、家の没落、祖母に苦悩をもたらした一人物という描写にすぎなくなってしまった。また、祖母の内面を描くためには、苦悩をもたらす祖父の存在を外せないのだが、三島自身にとつては常に祖母を通しての祖父がいるだけで、祖父個人については語るべきことがなかったと考えられる。それはやはり、祖父を真正面から見る機会を祖母によって遮られたからといえるのではないだろうか。xxxiii

三島には、三島を生んだ平岡倭文重という母がいるだけで、本当の心の母はいなかった(或いは、心から母に近づいたことがなかった)。そして、ユーモアはあっても日本文明観が息子よりも圧倒的に浅薄な平岡梓という父がいるだけで、三島家という家庭には真の男が一人もいなかった。能の『弱法師(よろぼし)』でさえ、父・高安通俊が一旦は捨てた息子・俊徳丸と共に花を見、息子を取り戻すのに比べて、平岡梓の息子に対する態度は、想像以上に軽薄なものがある。梓と倭文重と三島は、会話しても全員が異なる次元、異なる星に住んでいるのであり、会話していいと言ってもよい。本当は倭文重と三島だけは同じ次元同じ星に住むことができたのだが、祖母と父の振る舞いによってその道は絶たれた。

三島は『豊饒の海』の次に俊成・定家を書こうとしたが、俊成が実父よりもずっと深く日本文明観に優れた男であることを知って、その息子である定家に嫉妬した。自分に定家は書けないと思った。仏教の唯識論に輪廻転生と神道靈字を混ぜたものはもう『豊饒の海』で書いてしまった。自分には地上界でやることがなくなった。武士として、どこか真の天皇が君臨する、地球以外の星にある異世界日本帝国に転生するほかなくなった。森田だけはその宇宙船に乗ってもらった。それが三島の自決の全ての原因であり、真相であると私は考える。

## 男とは(十二) 男の年の取り方について

三島とスポーツの関係は見ていて非常に危うい、というより、悲しいもので、三島の肉体は西洋のスポーツに向いていなかったのは勿論、武道にも向いていたかどうか怪しいものであった。文学に向いていた肉体、というより手先だけは持っていたということしか、断言できないのである。

昭和の日本の男が示し合わせたかのように始めたスポーツとして、ゴルフがある。酒、煙草、女の三点セットほどには、それがないと男でないというほどのものではなかっただろうが、ゴルフ会員権なるものが未だに法律上の処理の難題になっており、特別に法律まで作られている滑稽さを見ても、戦後日本の男らしさの象徴にゴルフがあったことは否めない。しかも、老体になってから俄かにゴルフを始める男もいて、色んなレベルのゴルフアーが溢れているのである。私の父もゴルフをするが、私は全くしないという具合に、世代による競技人口の差が顕著なスポーツでもある。



ゴルフは、元々はほとんどの西洋白人、ヨーロッパ大陸の男の肉体には全く照応するところのないスポーツだったようだ。特に、ありとあらゆる用具とホールとがヤード・ポンド法の経験論の賜物であるので、メートル法を採用した大陸法系文明の独仏伊西のほとんどの男には関心を持たれていない。

ところが、ブリテン島と新大陸に渡ったアングロ・サクソンだけは違った。ただ単純に世界ランキングを見ても、常に九割がアメリカ、イギリス連邦またはイギリスの植民地の構成国、北欧、イスラエル、アフリカ、韓国、次いで日本の男ばかりで独占されている<sup>xxxiv</sup>。最近では、国によってはメートル法でゴルフをやったり、グリーン上でのみメートル法を採用したりと、何とかして度量衡だけはアメリカ・イギリス連邦の意見を封じる動きがあるようだが、ゴルフ界ではヤード・ポンド法が死ぬことはない<sup>xxxv</sup>と見える。

そもそも尺貫法があつて日本人が短足になつたのではなく、日本人が短足だったからそれに合わせて尺貫法ができ、畳の大きさだろうが銭湯の広さだろうがそれでできているわけだ。京間と江戸間の違いは日本人の短足の範囲内の誤差であつて、白人のために大きく京間にしたのではない。その日本の男の身体が、或るポンドの球を或るヤードだけ飛ばす困難さを思い描いてみるべきである。日本の男のゴルフは、本場アメリカやイギリスと違ってよいし、また違うべきである。日本には日本のゴルフがあり、日本の男だけの「いき」な、つまりは色気のある、武士道的意気地の精神に則つた、仏教的諦念の境地によるゴルフをしてよいと考える私である。

日本にはナンバ走りという走法があつたと記録されるが、末續慎吾選手が西洋のひたすら馬力・トルクで推進する陸上と、全身を連関と解釈するナンバ走りとの融合を試みた。ゴルフや陸上に限らず、或いは散歩においても、日本の男らしさが表れていることが肝要であると私は考える。

三島の年の取り方の危うさを考えるとき、とりわけこのように英米スポーツの代表格であるゴルフと日本の男について、私は考えるのである。生まれ持った身体にそぐわない肉体の鍛錬の仕方や行動を取ると、五臓六腑の働きまでもが自分に、他人に、そして世界に合わなくなる。自分の肉体が抱える世界への不整合、自分の肉体に合わない形での世界解釈は、やがて自決のみを選択する。ここでも三島は、ペンの上では日本の男らしい年の取り方を分かつて読者に説いていながら、東洋医学や、日本人による日本人のための度量衡や、自らの背丈・体重を全く無視して、「無理矢理にたくましく美しい男」を自分で人造してしまっている。

ゴルフで言えば、「いき」なゴルフというものは、英米とユーラシア大陸のゴルフアーには存在しない。日本の男がゴルフ場に足を踏み入れるということは、神社の鎮守の杜に足を踏み入れるのと同じ境地でなければならない。この境地もまた、英米とユーラシア大陸の男には存在しない。わざわざ輸入されたゴルフをやるということは、白人の真似事をするのではなく、ゴルフを堂々と黄色い肌の肉体に合わせて行い、「いき」なゴルフとは何かを英米に教え返すほどの男を追求するということである。

三島は、一挙一動を自分の肉体に合わせることを知らなかったし、文体も肉体に合わせようとしなかった。もし合わせたら、三島文学が太宰文学に一致する高い可能性があった。それを薄々分かっていて、言葉も肉体も着飾った。三島が自身の肉体に対して行ったことは、西洋的肉体のコロニー化（入植）であった一方、和服に合う男を作ること、日本の男らしいゴルフをすることではなかった。日本の男が日本の度量衡を無視した肉体を作るというのは、そもそも自分を産んだ母の子宮のサイズを否定すること、母という歴史を否定すること、自分が生まれたこと自体を否定することである。母の愛情不足の男にはこれがいとも簡単に起きる。三島にはそれが起きた。一度着飾った肉体は老後を嫌うようになる。そして実際、三島という男に老後は存在しなかった。

### 男とは（十三） 男にしか分らないものについて

私の文芸批評論の授業で、たびたび平安・鎌倉時代の和歌の歌合を取り上げ、歌合の真似事もしているが、「古語を読めるようになることは望ましいが、ジェンダーの観点で嫌気が差したら、そこは遠慮なく現代風に作り変えてよく、昔のままを再現しなくてもよい」と教えている。

というのも、男性歌人は官位・職階・本氏（本姓）本名の全てが暴露され、歌集に載るのも当たり前、一方で女流歌人と言えば、「伊勢」、「相模」など有名な歌人がいるが、皇族女性以外は皆、「親族男性の勤務先が伊勢守や相模守であるところの娘・女」というだけの意味である。これは勅撰和歌集の研究者の間では当たり前の知識であるが、そのまま昨今の授業に適用すると人権問題になる。

一度だけ、日本古語・大和言葉の神髄を理解してもらうために、男子学生には「日本大学芸術学部文芸学科〇〇〇〇」を名乗らせ、女子学生には祖父や父や兄の勤務地を名乗らせ（「世田谷」、「練馬の女」など）、LGBTなど性的少数者は男女いずれかのバイナリー・ジェンダー様式に無理矢理押し込めるという再現をしようかと考えたが、さすがになかった。

しかし、和歌マニア、或いは神道・アニミズム・シャーマニズム愛好家である私が言うならば、本来は、前述のような授業をしなければ日本古語の神髄は体験できない。それは、日本古語を間脳で官能・感応体験できないという意味に等しい。ここには、女の言葉は霊である（言霊であり、官能でもあれば、同時に呪い、怨霊でもある）という避けられない「真実」がある。このことを体験できず、従って真の日本古語を教えることができない国文学者は多い。

漢字を真名といい、女の書く何やら曲線美のある文字や簡略化した真名を仮名といい、後者が今のひらがな・カタカナなのであるが、前者即ち男が発言する音声、記述する文字というのは、とつくに早くから（それは当然、隋・唐などの中国皇帝への畏怖から）政治色つまり歴史書を書くためのツール性を帯びて有史以前の日本古語・大和言葉の霊性を失いかけ

ている。その靈性が女の言葉と文字には残っている。女の名前も靈である。従って、女が本名を男に向けて発した時点で、男は呪いにかかるし、逆に本名を自分に教えてきた女についてはその全員を自分の妻としてよい。古語の「あふ（逢ふ・会ふ）」は“meet, じゅ” see, ではなく、“meet and sex”である。つまり、女が男に本名を教えることと、女が男の寢床に入ることは、同義である。（同義に作っているのではなく、藤原定家も伊勢も相模の脳も、それらを区別できない。）大岡信がかつて「詩の日本語」で述べたような、当時の歌人のメタ視点の欠落による日本文化発展への奏功は、いま述べたこととほぼ同論であろう。

あまりにも長年和歌マニアを続けていると、いわゆる心理学上の「ZONE」に和歌をもつて陥ることがある。例えば、新古今集卷五巻頭歌「白妙の袖の別れに露落ちて身に染む色の秋風ぞ吹く」（藤原定家）の歌を官能であるという自信があるとき、既にその者はこの一首に登場する女と性行為をするも同然の感覚を体験することになる。そこで、女は歌であり、歌は女であるということを感じる。男自身が歌になることはない。男は歌の操り手だからである。その益荒男・防人・武士としての諦念のもとに、このような一首をれっきとした「いき」な性的感動であると感じられる心が、和歌の心である。

和歌については、やや無理矢理に、人工的と言ってよい具合であれば、私ならかうじて、俊成や定家や家隆の歌にそれを感じることができてきた。逆に言えば、彼らのような一夫多妻の境に入るには（潔癖症・神経質と言われた定家でさえ、妻は複数いた時代のことである）、日本古語のモーラの一音一音につき、そこにかかっている呪いの一つ一つに対処できるだけの歌道を持った男でなければならない。その男の境地を俊成は「幽玄」と言っている。定家は「有心」と言った。男の一夫多妻道は、即ち歌道・文芸道と表裏一体であり、歌を我がものにしない男が女をものにするこの恥が、彼らにはあった。この「歌道的なるもの」が現代の一夫多妻制に見出されるかと思つて探すと、見出されるわけではないのは自明である。

三島は、自決をしない場合には藤原定家に関する小説を書くこうとして、既に構想はあったか、或いは本文を書き始めていたか、結局は書かなかったか、失敗したのか、自決の道を選んだ。川端康成も、東山文化の枯淡の境地を小説に書こうとしたが、取りやめて自殺した。彼らがそれらを書けないと考えた一因には、ただ単純に自国の古典を原文で読める言語学的鍛錬を、小説執筆ほどには積んでいなかったこともあるだろう。

私は、むしろ古典、特に和歌ばかり渉猟して多数の歌を暗記しているのだから、男が生涯かかってもあらゆる時代の文芸ジャンルを渉猟することができないことぐらいは、私も分かっている。しかし、特に三島に関しては、日本語は着飾らなくても美しいということをどこまで知っていたかが、私には疑問である。自国語・母語の美しさが足りないと考えて、元来の「母語の肉体・身体」に輪をかけて不自然な脚色表現を並べ立てるのは、バベルの塔以来の中東語や欧米語の発想である。「深草の里」や「白妙の袖」というフレーズのみで官能的・「音楽」的世界解釈を全身で創造し、また感受できる俊成・定家・家隆・良経らの「男」の力を、私は改めて思い知るのである。

三島は、『豊饒の海』の唯識論で自分なりに世界解釈はできても、定家の和歌の日本語は

恐らく理解できなかった。徹底的に女々しいようで、実は最も男らしい彼らの日本語の遊戯を前に、三島は自らの理解の度を超えていると悟り、俊成や定家を論じるのを諦めたのではないだろうか。そうだとすると、三島がそのことを自ら漏らすわけはなかっただろうが。

## 結 父と母について 三島が天皇よりも無視した男・父

三島由紀夫という男は超克されなければならない。しかしそれは、三島が間違った男だったからではなく、三島のやり方で日本の男は何も変わらなかったからである。

「割腹自決で、他人を、他の男を、変えることはできない」

この簡単なことが、三島にはどうしても分からなかった。そもそも、切腹は、男の自分が何か失敗をしでかしたときに家系一族の名誉保持と刑罰のために行うものであって、自衛隊を動かすのに使う方便やツールではない。この時点で三島は間違った男かもしれない。だがそれよりも、ほとんどの国民の男にとってこの事件が自分という男を見直すための大した機会にならなかったことが問題である。

二〇〇七年頃から、和歌の歌会に参加するようになった。とりわけ、文壇・歌壇や文学教育界でほとんど知られていない一方で一部の和歌マニアが崇敬している水垣久氏の歌会に参加するようになってから（当時はいわゆるBBSといって、ネット掲示板を有効活用して行われていた）、より一層、後鳥羽院・御子左（みこひだり）歌壇の歌人を私の人生の師と仰ぐようになり、藤原俊成・定家父子や、九条良経、藤原家隆、源通具らの歌を常に手元に置くようになったが、今でも俊成を私の父に、定家を私自身になぞらえる癖が抜けない。これらはいずれも、三島由紀夫が自決しなかったと仮定したら、次の作品の主人公になっておかしくなかった日本美の体現者たちである。少なくとも定家については、三島は小説のモデルとしたい旨を漏らしてから自決した。

俊成の歌は、大様かつ鷹揚であり、彼が撰した『千載和歌集』のその名の通り、千載の松が枝のごとく、悠久の日本の男を代表する泰然自若ぶりを發揮したものである。

夕されば野辺の秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里（千載）

思ひあまりそなたの空をながむれば霞を分けて春雨ぞ降る（新古今）

これぞ日本の男が四季と恋とをいかに捉えるべきかをわずか三十一文字で十二分に教える名歌である。同時に私はいつも、俊成の歌を見て我が身を恥じるのである。私の歌は以前から定家的であり、すなわち過度に修辞技法的なところがあり、その性格もまた定家に似て、日本の美が完璧に使用語句に忠実に表現できているかを一々吟味しなければ気が済まないところがある。

俊成の歌は私の父を見ているようであり、定家の歌は自分を見ているような気がするのである。一度も変わることなく二十年を迎えようとする感覚なのであるから、何ら勘違いで

はなく、実際に定家も、俊成と比べたときの我が歌について、過度な技法の進化ぶりに自画自賛すると同時に、父の泰然自若とした歌を超えられない自分を知ったであろう。

しかし、その定家の歌の中でも、父・俊成の幽玄の境に入ったか、或いはそれを超えて詠んだ歌がある。

春の夜の夢の浮橋とだえして峰にわかるる横雲の空（新古今）

白妙の袖の別れに露おちて身にしむ色の秋風ぞ吹く（新古今）

かすみあへず猶ふる雪に空とちて春ものふかき埋み火のもと（風雅）

和歌マニアの矜持があるからというわけではないが、定家が自分の神経質な性格を承知して、可能な限り父の歌の雄大さを目指しており、そしてその幽玄の域に達し、幽玄を発展的に有心の境にまで上らせていく過程が、私にはこれらの歌にありありと見える。父を超えたとか超えていないとかいう目に見えない判定は、私の中では俊成の歌を追いかける定家に迫いつけたかどうかという判定と、全く同意である。

母についての私の持論は、「D文学通信」といって、この原稿の依頼者である清水先生主宰の文学雑誌のネット版ほか、私のウェブサイトにも載せている。『絶対的一者、総合芸術、総合感覚をめぐる東西・男女の哲人の苦闘——ニーチェ、松原寛、巫女の対比を中心に——』がそれである。こちらの方が今書いているものよりも圧倒的な長編だが、父母への思慕の情の差を意味するものではない。単に、父のことは和歌への思弁で、母のことはひたすら論じて、思慕を表現しただけのことである。

三島は、殊に実父と実母のことになると、三島のいうところの「男らしさ」や「女らしさ」のどこに位置付けたいのか分からない。恐らくは、三島にとって、父と母は、三島が考える男と女には入っていないかっと思われる。『倅・三島由紀夫』に対する三島の応答は『父・平岡梓』なるオマージュにはならなかったし、母についても、祖母・夏子の強烈な記憶以上のものではなかったようである。むしろ、三島に女言葉を使わせ、女の子遊びをさせるという夏子の育て方が、三島の反骨精神と、こう有るべきと思う日本の男女像を醸成したと言えるばかりである。

益荒男がたばさむ太刀の鞘鳴りに幾とせ耐へて今日の初霜

散るをいとふ世にも人にもさがけて散るこそ花と吹く小夜嵐

本当に戦乱に巻き込まれた源実朝の歌よりも、兵役を逃れた男の詠んだ物騒な辞世の歌である。戦争に行ってもいないのに、この歌を時世としたことに、実朝は怒るであろう。しかし、三島にとっては最後に男として詠むべき歌はこれしかないと思えた。あまりに悲しい歌であるが、天皇の他に、楯の会の一部メンバーを除いては、父・梓を含め「憧れの男」に生涯遂に出会わなかった三島の、つまりは、天皇以外に父なる存在がいなかった男の、やむ

を得ない叫びであったことだけは、全面的に追認したいと思う。

二〇二五年三月二日 起筆、四月二十日 搁筆

清水正氏に捧ぐ

また、清水氏ご依頼による寄稿の機会ながら、我が愚父にも捧ぐ

参考文献（これらの引用部分、および引用のみに用いた文献とその引用部分は文末脚注で後述。同一内容がウェブサイト上にも掲載されているものの、書籍・冊子等文献による入手が可能であった場合は、全て参考文献に掲載し、参考ウェブサイトでは省略した。ウェブから引用した場合は省略せず、その論文等文献の情報を文末脚注に掲載した。）

▽三島由紀夫著作

『愛の渇き』 新潮文庫、二〇一一年

『英霊の聲…オリジナル版』 河出文庫、二〇〇五年

『音楽』 新潮文庫、二〇〇六年

『禁色』 新潮文庫、二〇一三年

『行動学入門』 文春文庫、二〇一〇年

『潮騒』 新潮文庫、二〇〇五年

『師・清水文雄への手紙』 新潮社、二〇〇三年

『第一の性』 集英社、一九七三年

『反貞女大学』 ちくま文庫、一九九四年

『美德のよろめき』 新潮文庫、一九八七年

『不道德教育講座』（改） 角川文庫、一九九九年

『豊饒の海』第一〜四巻 新潮社、一九六九〜一九七一年

『女神』 新潮文庫、二〇〇二年

▽他著作

荒木尚 編 『新勅撰和歌集（永青文庫本）』 古典文庫、一九八一年

飯島洋一 『〈ミシマ〉から〈オウム〉へ 三島由紀夫と近代』 平凡社、一九九八年

石原慎太郎 『太陽の季節』 新潮文庫、二〇一一年

石原慎太郎 『三島由紀夫の日蝕』 新潮社、一九九一年

井上隆史 『三島由紀夫 虚無の光と闇』 試論社、二〇〇六年

大岡信 『日本語の世界11 詩の日本語』 中央公論社、一九八〇年

大岡信 編 『現代詩の観賞101新装版』 新書館、一九九八年

川端康成 『抒情歌・禽獣 他五篇』 岩波文庫、二〇〇五年

九鬼周造 著、藤田正勝 全注釈 『「いき」の構造』 講談社学術文庫、二〇〇三年  
 久保田淳、松野陽一 校注 『千載和歌集』 笠間書院、一九七〇年  
 佐佐木信綱 校訂 『藤原定家歌集』 岩波文庫、一九八五年  
 清水正 『三島由紀夫・文学と事件』 D文学研究会、二〇〇五年  
 世界基督教統一神霊協会 『天聖經』 二〇〇三年  
 蛋白質 核酸 酵素 編集部 『蛋白質 核酸 酵素』 共立出版、一九九四～二〇〇四年  
 戸塚宏 『敵は脳幹にあり』 アポロ出版、一九八八年  
 富岡幸一郎 『仮面の神学』 構想社、一九九五年  
 平岡梓 『倅・三島由紀夫』 文芸春秋、一九七二年  
 松本徹・佐藤秀明・井上隆史 編 『三島由紀夫・仮面の告白』 鼎書房、二〇〇六年  
 三島由紀夫、石原慎太郎 『三島由紀夫 石原慎太郎 全対話』 中公文庫、二〇二〇年  
 峯村文人 校注・訳 『新古今和歌集』 小学館、一九八三年  
 山崎行太郎 『小説三島由紀夫事件』 四谷ラウンド、二〇〇〇年

▽参考番組・映画

NHK特別番組「川端康成氏を囲んで」 出演：川端康成、伊藤整、三島由紀夫 一九六八年十月十八日  
 G A G A 「三島由紀夫VS東大全闘50年目の真実」 二〇二〇年

▽参考ウェブサイト

日本会議 <https://www.nipponkaigi.org/> (二〇二五年三月九日～四月二十日閲覧)  
 戸塚ヨットスクール <https://totsukayachtschool.com/> (二〇二五年三月九日～四月二十日閲覧)

- 
- i. 『〈シンシマ〉から〈オウム〉へ』二九三頁
  - ii. 『三島由紀夫・文学と事件』三六六頁
  - iii. 諸橋憲一 「哺乳類生殖巣の分化」『生殖細胞の発生と性分化』 四八四～四九〇、共立出版、二〇〇〇年
  - iv. 諸橋憲一 「哺乳類における生殖腺の性分化」『蛋白質核酸酵素』二〇〇四年二月号 (Vol.49 No.2) 一三〇～一三四、共立出版、二〇〇四年

v. *Turnover of mammal sex chromosomes in the Sry-deficient Anami spiny rat is due to male-specific upregulation of Sox9* (Sry 遺伝子をもたないアンミトゲネズミでは、オス特異的な Sox9 遺伝子の転写制御を獲得することで性染色体の転換 (ターンオーバー) が起きる), Miho Terao, Yuya Ogawa, Shuji Takada, Rei Kajitani, Miki Okuno, Yuta Mochimaru, Kentaro Matsuoka, Takehiko Itoh, Atsushi Toyoda, Tomohiro Kono,

- Takamichi Jogahara, Shusei Mizushima, and Asato Kuroiwa, <https://www.pnas.org/doi/10.1073/pnas.2211574119>, November 28, 2022
- <sup>vi</sup> „ *Putin appointed “chief exorcist” as Kremlin whips up satanic panic* „ Newsweek, October 26, 2022
- <sup>vii</sup> “ 杉田議員、女性はいくらでもうそ 自民党の合同会議で蔑視発言、共同通信、二〇二〇年九月二十五日
- <sup>viii</sup> “ 杉田水脈氏 性暴力被害者巡り「女性はいくらでもうそ」 問題発言繰り返す背景とは ” 毎日新聞、二〇二〇年九月二十六日
- <sup>ix</sup> “ 伊藤詩織さん中傷ツイート訴訟、漫画家らに賠償命令 東京地裁 ” 毎日新聞、二〇二一年十一月三十日
- <sup>x</sup> “ 漫画家らに110万円賠償命令 伊藤詩織さんの名誉毀損―東京地裁 ” 時事通信、二〇二一年十一月三十日
- <sup>xi</sup> 竹内久美子 “ 「日本型リベラル」の化けの皮―ガラパゴスなサヨクたち 知らずにはびこる反日洗脳と言論封殺 ”、別冊正論三十一号、産経新聞社、二〇一八年三月二十六日
- <sup>xii</sup> 「三島由紀夫 vs 東大全共闘」東京大学駒場キャンパス900番教室、一九六九年五月十三日
- <sup>xiii</sup> 『行動学入門』九十一頁
- <sup>xiv</sup> 『行動学入門』九十二頁
- <sup>xv</sup> 「三島由紀夫の筆、石原慎太郎を政界へ…石原の遺品に書簡6通「世の有象無象を御覧になることを望みます」」 読売新聞、二〇二五年二月二十四日
- <sup>xvi</sup> 「見つかった石原慎太郎宛ての三島由紀夫の書簡 2人の関係生き生きと」 読売新聞、二〇二五年三月四日
- <sup>xvii</sup> 『潮騒』二五九頁
- <sup>xviii</sup> NHK特別番組「川端康成氏を囲んで」
- <sup>xix</sup> 同前
- <sup>xx</sup> 同前
- <sup>xxi</sup> 「定職に就かず、9人の「妻」と一夫多妻生活…《76歳の自称占い師》が自ら築いた「ハーレムの館」で自殺するまで」 週刊現代、二〇二五年一月二十四日
- <sup>xxii</sup> 「イエスの方舟」騒ぎは何だったのか かつて消えた女性たちにカメラが迫る◆映画「方舟ののって」公開」 時事通信、二〇二四年七月十日
- <sup>xxiii</sup> Beauchamp, Zack (April 25, 2018). “*Incel, the misogynist ideology that inspired the deadly Toronto attack, explained*”. Vox. New York City: Vox Media. Archived from the original on May 5, 2018. Retrieved May 5, 2018.
- <sup>xxiv</sup> Mezzofiore, Gianluca (April 25, 2018). “*The Toronto suspect apparently posted about an ‘incel rebellion.’ Here’s what that means*”. CNN. Atlanta, Georgia. Archived from the original on April 26, 2018. Retrieved April 26, 2018.



---

xxv	NHK特別番組「川端康成氏を囲んで」
xxvi	『現代詩の観賞101新装版』八十六～八十八頁
xxvii	「三島由紀夫 vs 東大全共闘」
xxviii	『<シム>から<オウム>へ』二九二頁
xxix	『仮面の神学』十五頁
xxx	Lewis, James R., ed. (2001). " <i>Odd Gods: New Religions &amp; the Cult Controversy</i> ".
	Prometheus Books. ISBN 1-57392-842-9 – via Internet Archive.
xxxi	Zeller, Benjamin E. (2014a). " <i>Heaven's Gate: America's UFO Religion</i> ". New York
	University Press. ISBN 978-1-4798-0381-1.
xxxii	『三島由紀夫・文学と事件』三三四頁
xxxiii	『三島由紀夫・仮面の告白』大西望 一〇三頁
xxxiv	Official World Golf Ranking <a href="https://www.owgr.com/">https://www.owgr.com/</a>